谷口研究室

1990年度年間活動報告書

Vol.8

甲南大学文学部

丸木位里・俊　画

谷口研究室
1990年度年間活動報告書

Vol. 8

甲南大学文学部

目　次

巻頭言　谷口　文章　1

Ⅰ．第二十回ゼミナール合宿（春季）
1．日程　5
2．春合宿の解説　6
3．研修レポート
ＫＪ法の現代における意義と実習について　小谷　英子　7
理解・発想の方法としてのＫＪ法　天野　雅夫　11
ＫＪ法を体験して　松本　昌樹　16
ＫＪ法Ｂ型（文章化）課題まとめ
～「現代社会における環境と
保健医療の諸問題」について～　井垣　博美　17
フィンガーペインティングを通して気付いたこと
北村　光子　20
フィンガーペインティングを体験して　平岡　未央　22
フィンガーペインティングの感想　榎本　修一　23

Ⅱ．第二十一回ゼミナール合宿（夏季）
1．資料　29
2．日程　31
3．夏合宿の解説　33
4．記録写真　34
5．研修レポート
現代人の「見方」についての考察
～淡路島モンキーセンターでの経験を手掛にして～
天野　雅夫　37
真の意味での共存とは？　辻　孝司　40
淡路島のサルたちの自然な姿にふれて
～生命の連なりを知ること～　小谷　泰子　43
奇形ザルに出会って　奥山　昌治　44
食料・自然・生命　北村　光子　46
サルにおける観察の意義　島津　一樹　48
科学的思考と環境問題　真野　裕澄　49
ＶＴＲ撮影を通じて感じた「環境問題」　木戸　英貴　51
ヨーガの思想と実践　渡辺　昧比　54
ヨーガと私　吉川　亜子　57
揺れたバラの花　前田　拓志　59

6．看護とケア
看護に対する私の考え方　寺本佳利子　61
看護について考えること　松本　一美　62
7．夏合宿運営後記　井垣　博美　65

Ⅲ．学園生活の一風景
1．一般教養「哲学」の講義の一コマ
「青い目　茶色い目」（ＶＴＲ）の感想　71
2．学園祭模擬店運営後記　天野　雅夫　75
3．卒業旅行「淡路島」私見　小花　直樹　76
4．ＶＴＲ製作後記
（１）「淡路島モンキーセンターＶＴＲナレーション」から　79
（２）'90年夏合宿ＶＴＲあらすじ　天野　雅夫　80
（３）ＶＴＲ製作を通じて
その１　小西　克弥　81
その２　木戸　英貴　82

Ⅳ．卒業論文・卒業実験・研究生論文・ゼミナール論文
1．卒業論文・卒業実験
現代における絶望
～キルケゴールの『死に至る病』をめぐって～　松本　昌樹　87
「金融環境の変化と公的金融」　小花　直樹　89
ポスト・パックスアメリカーナと日本の役割
～日米貿易の視点から考える～　吉川　亜子　93
アメリカザリガニの脱皮ホルモン
～Y-器官からの分泌と体液中の組成について～　辻　孝司　93
キイロショウジョウバエの雄減数分裂
～突然変異系統のm144の解析～　村松　圭吾　100
2．研究生論文
フーコーのアルケオロジー　田中　素子　103
和辻倫理学における「人と人との間」について　天野　雅夫　107
3．ゼミナール論文
心理療法を考える　辻　啓之　109
人間性の回復を求めて　小西　克弥　111

Ⅴ．甲南大学総合研究所
「人間の深層心理と社会の深層構造」研究会

1．総合研究所所報　117
2．研究発表要旨
経済学における合理性と非合理性
～シュンペーターの学説を中心に（試論）～
永友　育雄　125
ドイツの自動販売機　藤本　建夫　129
3．研究会記録　134

Ⅵ．亀岡生涯学習市民大学
1．平成二年度　亀岡生涯学習市民大学　開講にあたって　139
2．開設趣旨　140
3．講義：「心豊かに感じ、考え、行動すること」
谷口　文章　141
4．市民大学の受講を終えて　179

Ⅶ．研究室活動内容
1．講義概要　185
2．活動記録　188

編集後記　190

巻頭言

甲南大学　文学部　助教授　谷口　文章

四年間のおつきあいの中で成長した若者たちとの別れの寂しさを、新年の前後から感じ始めます。とくに1月に入ってからは、学年末テスト、入学試験、卒業論文が終わり、さらにゼミ合宿、卒業旅行のあと、ひしひしとその思いに駆られるのが常です。

研究者はモラトリアムでいられるかもしれませんが、厳しい人生を乗り越えて行くために、これからの彼らにはしなやかな姿勢が必要とされるでしょう。

人生をつまらないものにするかどうかは、その人の生きる姿勢がつまらないものかどうかにかかっています。卒業生のいっそうの発展を期待したく思います。

本年度は、甲南大学総合研究所の研究チーム「人間の深層心理と社会の深層構造」も後半に入り、成果をめざして和やかな中にも真剣な討論がくりひろげられ、実りある研究所叢書ができあがりそうである。これも、研究員の先生がたのお陰である。

また、従来から訴え続けてきた“環境問題”は、原点に立ち還る意味で、七年ぶりに淡路島モンキーセンターで夏合宿を行なった。重度の四肢奇形である第二、第三のコータが、今年もまた生まれているという実情を目の当たりにして、一同襟を正す気持ちだった。

そして12月には、亀岡市・亀岡市教育委員会主催の生涯学習亀岡市民大学において、「心豊かに感じ、考え、行動する」という題目でお話しをする機会を得た。市民の人々と接して、環境の論理と倫理がいま切に求められていると改めて感じたのであった。

さらに、来年度4月から発足する「21世紀の人間と地球の環境を考える」という総合科目の研究チームが、教養課程運営委員会、および文学部、理学部、経済学部、法学部の各学部教授会で承認された。再来年度の総合科目特設講義の開講めざして学際的に研究会が行われる予定である。

この一年は環境問題にあけくれた観があるが、実のところ人間の深層心理の歪みが社会の深層構造を歪めてきたとは考えられないであろうか。いいかえるなら、内的な人間本性の汚染が外的な自然・社会という外的な環境汚染を生ぜしめたのではないだろうか。ともあれ、まだまだこの問題は追求し続けられねばならない。

この一年の研究室活動を支えてくださった総合研究所研究員の諸先生、淡路島モンキーセンターの中橋所長および御家族の皆様、淡路島千福寺山階宏泰住職、亀岡市教育委員会の高屋輝雄氏、教養課程運営

委員会の池田綾子氏に深い感謝の気持ちを表したく思います。また本報告書を作成するにあたって、いつもながら複写センターの新戸建男氏に大変お世話になりました。ありがとうございました。

ゼミの運営にあたって、幹事の井垣博美、北村光子、阿部哲也、VTR記録委員の天野雅夫、小西克弥、木戸英貴、写真記録委員の辻孝司、村松圭吾、大学祭委員の光石好雄、村嶋　務、平岡未央、卒業旅行委員の小花直樹、報告書委員の木戸英貴、奥山昌治、永野智仁そしてゼミ生全員に感謝したく思います。

（1991年3月）

I

第二十回ゼミナール合宿（春季）

1．日　程

《 第20回ゼミナール合宿研究発表会のお知らせ》

目　　的：研究発表及びプレイ療法実習
講　　演：谷口文章先生　「精神病理の理論と神経症の事例報告
　　－哲学の視座から－」
日　　時：３月18日（日）～３月20日（火）
宿 泊 地：関西地区大学セミナーハウス
　　神戸市北区道場町生野字ロクゴ 318－2
　　☎ 07956－4－4391
集合場所：ＪＲ宝塚駅　改札口　午前11時半集合
費　　用：16000円（前金は、そのうち5000円）
申込方法：住所・氏名・電話番号・所属を書き添えて、前金5000円を
　　下記までお送り下さい。
　　〒612 京都市伏見区久我御旅町1－1
　　辻　啓之
◎研究発表の参考文献：
＜哲学系＞丸山圭三郎『フェティシズムと快楽』（紀伊國屋書店）
＜医学系＞中川米造『環境医学への道』（日本評論社）
＜教養系＞中橋　実『がんばれコータ』（長征社）
◎プレイ療法実習：フィンガーペインティング、KJ法、自律訓練法、
　　箱庭療法
問合わせ：辻　啓之　　☎ 075－931－3806
　　井垣博美　　☎ 0792－69－0107
　　谷口文章先生　☎ 07712－3－9464
☆申し込みの締め切りは２月末日とさせて頂きます。
　ふるって御参加下さい。

2．春合宿の解説

従来、春合宿は、基本のベースとして、一年間の成果を発表する機会である。卒業論文研究、ゼミ論、共通の課題テーマについての発表等々。

それに加えて、今回の合宿ではフィンガーペインティングとＫＪ法の実習をおこなった。前者では指に絵の具を直接つけ、そのままキャンバスに絵を画き、内面の自己を表現する。「指」を筆がわりに直接使うことで、より原初的な感覚が解放される。また4、5名の作業は一種の社会性をもつ。最初のうちの規制された個人の表現が、次第にキャンバスの空間がなくなると他の人のテリトリーや絵を破壊していき、アグレッシブな感情が出てくる。しかし、作り終えてから、ハサミとノリで共同の作品を作るときになると、内面の自己表現、攻撃性はすでに十分表出されつくしているため、調和した感情で自然に一つの作品へ統合されていく。

後者のＫＪ法では、「現代社会における環境と保健医療の諸問題」を共通のテーマとし、三グループに分かれ、個々人が意見を出してカードにまとめ、バラバラの知識が集積されることによって新しい見解が形成される方法である。この方法は、共同でおこなうフィンガーペインティングと類似しつつ、内面の解放というより社会的レベルでの「知の創造」の体験である。今回の演習では各グループで興味深い結論が出たようである。

これらのフィンガーペインティングやＫＪ法によって、ややもすれば自己完結的な若者たちが人と人との交わり、共鳴、創造性を体験したのであった。

３．研修レポート

ＫＪ法の現代における意義と実習について

大阪大学大学院医学研究科　修士課程二回生　小谷　英子

１．現代におけるＫＪ法の意義

物質文明に生きる私たちは、身体的な飢えからは解放されたが、心の飢えはますます深刻になっている。「パンの為に生くるにあらず」といわれるように、肉体を維持する日々の糧だけでなく、生きがいや生きる意味という“心の糧”を必要としている。すなわち、マスローの言葉を借りるなら「欠乏欲求」のみでなく、「成長欲求」の充足を求めているのである。また、伝統の喪失や新奇な出来事の出現によって、たとえば家族制度の変化、試験官ベビーや臓器移植など、新しい行為の規範、倫理が不可欠になっている。さらに、近年の人間中心主義の結果である環境汚染や破壊は、人間の存在基盤さえ危うくしている。私たちは、生きる指針を根本からもう一度問わなければならない時期に、今さしかかっているのである。

さて、このように複雑に変転している現代社会において私たちは、煩雑な情報や資料をいかに取り入れ、適切な判断→決断→実行をいかに成し遂げるのか。そのための一つの有用な技法として、川喜田二郎氏によって提唱された「ＫＪ法」が挙げられる。その特徴は、外的な出来事だけでなく、エモーショナルな問題をも解決することである。「人間の心の新鮮な若返りをともないつつ、人びとのあいだに連帯を生みだしてゆく……」（川喜田『「知」の探検学』P.28）のである。そのためＫＪ法は社会の各層で、たとえば学究の手段として、グループ療法として、学校や企業における教育として、また地域社会づくりなどに用いられている。

このＫＪ法は、簡単にいえば、問題に関係のありそうなデータを多種多様な角度から集めたあと、一つの事柄を一枚のラベルに書き込み、そのラベルを一定のルールにしたがって“データをして語らせて”組み立てて行く。そして、「どうすればいいか全くわからない」といった渾沌に道筋をつけ、「お互いがわかりあえない」という合意の難しさを克服するのである。

しかし、このようなＫＪ法は単なる作業ではない。創造の“産みの苦しみ”をともなう。データの語りかける声を聞くには、先入観、偏見、自己主張などの、今までの自分の小さな殻を開かなくてはならないのである。そのため、現場や文献からの情報収集といった外的過程とともに、思考、内省などの内的過程を重視する。こうした両方の過

程を一方に偏らず、振り子のように行き来することによって、テーマを深めて行くのである。

2．ＫＪ法の方法～ラベルの組み立てとデータの取材～

次にＫＪ法の具体的方法について述べよう。この技法は、大きく分けて次の四つのステップを順次踏む。①ラベル作り→②グループ編成→③Ａ型図解化→④Ｂ型文章化（Ｂ´型口頭発表）。これが狭義のＫＪ法の一ラウンドであるが、広義には、元ラベルの素材集めも含めて一ラウンドのＫＪ法とする。まず、狭義のＫＪ法すなわちラベルの組み立てについてまとめたあと、ラベルに記入するデータの取材の仕方について考えてみたい。

＜狭義のＫＪ法＞

①ラベル作り：問題に関係のありそうな事柄を、一枚一枚のラベルに一つずつ、アピールするように書き込む。

②グループ編成：出来上がったラベルをカルタ取りのように並べる（「ラベル広げ」）。お互いに訴えが近いラベルをひとまとめにしていく（「ラベル集め」）。このとき他のものと仲間を作らないラベルは、一枚で一グループとする。各グループの方向性を新しいラベルに書き、ラベルの一番上につけて輪ゴムで束ねる（「表札作り」）。束が十束以内になるまで、ラベル広げ→ラベル集め→表札作りを繰り返す。

③Ａ型図解化：数束になったラベルを模造紙に広げ、訴える意味内容のうえで、もっとも落ち着きのよい配置の構図を探す（「空間配置」）。各束について一番外側の輪ゴムをはずし、同様に空間配置する。

これを繰り返して、一枚一枚のラベルのレベルまでしたあと、模造紙に張り付ける。

グループを島どりして紙上に描き、その線上に表札のラベルを貼る。島と島、島とラベル、ラベルとラベルのあいだを必要に応じて関係づけ、線や絵や添え言葉で表す（「図解化」）。

最後に、この図解全体の主題をつけ、作製したメンバー、時、場所などを記録する。

④Ｂ型文章化（Ｂ´型口頭発表）：こうした図解を元にしてにしてストーリーを作って行く。ラベルや表札の内容に接続の言葉をはさんで叙述していくだけでなく、さらに新しい発想や解釈を加えてもよい。口頭発表の場合は視聴覚的アピールが加わり、他者に理解されやすい。

＜データの取材の注意＞

さて、さらに元ラベルの素材の集め方についてであるが、「テーマをめぐり、(1)三百六十度の視角から、(2)飛び石づたいに、(3)ハプニングを逸せず、(4)なんだか気にかかることを、(5)定性的に、デー

タとして集める」(川喜田『同上』P.50)ということに気をつけなければならない。

(1)の多角的な視野が必要な理由は、事実とデータは同じものではないからである。データには観察と表現の方法手段が介在しており、誤差、器差、癖が含まれている。極論して、事実=真実とするなら、データには大なり小なり嘘を含んでいるのである。しかし、また同時にデータは真実の面影を宿しており、人間にとっての共通の認識の範囲がある。そこで、多角的にとらえたデータからは、人間の能力の範囲での真実が導かれるのである。

次に、(2)の「飛び石づたいに」という意味であるが、それは、すべて計画どおりに進めるのではなくて、すこし進めて新たな情報、発想を加えてから、それを手掛かりとして次に進むということである。これは、頭だけ、理性だけによる綿密な計画は、行き詰まったり、重要なものを見過ごしてしまうためである。フィールドに出て、体を使うこと、また(3)(4)(5)と関連したことだが、また直観をないがしろにしてはならないということである。この直観によってとらえられたものは、必要なことを端的にとらえている場合が多い。直観が理性に先行すること、すなわち直観によってとらえたものを理性によって判断することが肝要なのである。言い換えれば、定量化するのは、定性的にとらえたものであって初めて意味をなしうるのである。

また、(5)の定性的なデータの収集が、単なる主観に終わらないためには、そのテーマについての他者の意見をフィードバックするなどの工夫が大切である。なぜなら、人間はより広い視野を与えられると、自らの狭い観点に執着せず、よりよい観点に自然と移っていくからである。こうした観点によって、理念に導かれ、共感を呼ぶ意見が浮かび上がってくるのである。このことが、創造性の高い人物や人間として成熟した人物が、自らの内にさまざまな観点をもっているということと等しい状況を生み出すのであろう。

このようにして集めたデータをＫＪ法でまとめると、自然に座標軸の原点が自分中心から対象に移る。人間は誰しも、自分に都合の悪いことには目をつぶる、目新しい現象には大騒ぎするが当たり前になると忘れてしまう、自己・人間などを座標軸の原点に置いて、他者・状況・自然などを置くことができない、などの傾向性がある。しかし、座標軸が対象に移ることによって、異なった新しい秩序の見方が得られるのである。

３．ＫＪ法の実習体験

さて、今回の甲南大学谷口ゼミナール研修旅行では、このＫＪ法の実習を行った。ＫＪ法は、問題提起、現状把握、問題追求、構想計画、具体策、手順化、検証のそれぞれの場面で用いることができ、問題設定や場面やメンバーに応じて、さまざまな変種がある。この中から、

「文珠カード」をトゥールとしたＫＪ法が選ばれた。この方法は中川米造氏によるもので、三枚の連なったカードを交換しながら、上に書いてある意見をヒントとして、自由に自分の意見を書くのである。これは、人前で意見を主張するのが苦手な人が多い日本人に合わせて、工夫されたものである。７～11人のグループが活性が高いということから、三つのグループに分かれ、「現代社会における医療と環境」というテーマで行われた。

臓器移植・老人問題・ＡＩＤＳ・原発・森林伐採などの現象面の列挙、原因としての人間の果てしない欲望の指摘、自らの小さな実践、行政や教育のこれからの在り方、自らの意識変革の必要性などが、各グループによって図解化され、口頭発表された。内容はともかくも、以前別のところでＫＪ法に参加した体験と比較すると、お互いの自己主張によるテンションの高まりと、バラバラのものがまとまっていった後の充実感に大きな違いがあった。これは、今回は与えられた統一テーマであったため、興味の度合いや問題意識がメンバーの中でまちまちだったからであろう。しかし、ＫＪ法によって他者の視点を獲得することで、一人一人の問題意識が鮮明になり、強められたように思われた。

ＫＪ法において筆者が学んだことは、物事をするときに必要なことは、自己主張ではなく、自分がなにを今課題としているのか、その偽らない心の声を聴くということである。「自己主張があっては、すなおに受けいれることができない。虚心になって状況を受けいれ、生きいきとした状況そのものになりきることが必要である。そのとき、その状況は自分に語りかけてくる。こうすべきではないかと。」（川喜田『同上』p.197）その声にしたがって決断し、創造し、実践していくのでなければ、真の問題解決、真の創造、真の生きる意味を人生の上に見いだせないのではないだろうか。また、現代における多くの問題も、一方的な自己利益の主張や一般の人々とは無縁の専門的な議論に偏らず、人間としての共通の基盤を尊重した立場に立つ議論ならば、建設的なものになるのではないか。言い換えれば、等身大の、共感的理解可能な土台を互いが確認することが、まず必要ではないか。したがって、感性の覚醒のともなった、ＫＪ法による自覚の促進は、現代の諸問題に有効な手段の一つであると考えられるのである。

＜参考文献＞

川喜田二郎『発想法』『続発想法』（中公新書）
同上『「知」の探検学』（講談社現代新書）

理解・発想の方法としてのＫＪ法

甲南大学　文学部　研究生　天野　雅夫

１．ＫＪ法の実体験の報告

今回の合宿では、フィンガー・ペインティング（Ｆ・Ｐ）とＫＪ法が行なわれた。私たちは、Ｆ・Ｐにおいて人間の意識と無意識の複雑な関係について学び、ＫＪ法では「事柄を分かること」あるいは「仮説創造の方法」について学んだ。そこで、本レポートではＫＪ法が合宿でどのように行なわれたかを報告するとともに実際に体験した感想を述べ、最後にＫＪ法の役割について考察したい。

初めに会場ではこの方法についての説明があり、それから数人を一つの単位としたグループに分かれ、それぞれグループごとにセッションを行なった。用意したのは、文庫本サイズのメモ用紙とサインペンであった。

まず私たちは、そのメモ用紙にラベルを書き込んだ。実際には、そのテーマを私たちに明確に示すような短い文章をそのメモの一番頭に書いていった。今回のテーマは、環境倫理や医学倫理、公害問題、臓器移植の問題など多岐にわたったが、書き込まれたのは「日本における臓器移植の問題」であるとか「私の町の公害問題」というように、合宿その他のゼミ活動による体験をふまえてのものであった。さらに、ここで全員が注意しなければならないことは、多様な内容をもつ今回のテーマをできるだけ明確にするという点であった。

次に、先の短文について必要と思われる、あるいは関係の深い事柄をみんなで考えた。実際には、メモ用紙の一番頭に書かれた短文について、一巡するごとに一人一言づつ書き添えていった。そのとき、初めのうちはあらかじめ考えていたことを書いていくだけですんだが、三、四回も廻ってきたころにはそれも尽き、かなり頭を搾らないと書き込めなかった。この書き込みがさらに数セッション続き、最終的には各グループに数十枚のメモ用紙がたまった。

最後のセッションでは、それらを関係づけながら全紙サイズの台紙の上に貼り付けていった。そしてそのセッションの後、たくさんのメモ用紙を貼った台紙を、それがどのような過程でできあがったかを全体で発表したのである。

２．ＫＪ法の実体験で感じたこと

セッション自体はグループで行なわれたため自分以外のグループがどのような形で進められたか詳しくは分からないが、私のグループでは問題群によって考察の深さが問題だったように感じた。例えば、うまくいった例では、各人がその問題の提起者の考えをかなり深いところまで理解することができたが、進みにくかった例では、各人の問題意識の不明瞭さや現場の知識の欠如からか、表面だけを流れていく傾

向があった。また全体的に、その問題群に対する対処方法や解決の糸口自体は考察対象とはならなかったように思われた。

これらの実習で感じたことは、ＫＪ法には調査、言語化、視覚的・空間的理解（分かること）、発想法の作業が含まれているように思われたということである。調査とは野外科学、フィールド・ワークと呼ばれる行為のことである。これは、私たちの場合はゼミ活動に関係している[1]。言語化とは言葉に関する問題で、それは頭の中で漠然と考えている事柄（問題）を言葉にするという作業である。つまり、ある事柄を分節したり、異なった事柄を比較したり、差異化し、圧縮しそれらを明確にすることである。今回の合宿ではメモに書き込むという作業そのものが言語化に関係していた。視覚的理解とは客体化に関する問題で、それは問題群の関係を図式化し、問題を主体に対する客体にすることである。つまり、ある問題の（社会）全体における位置や、他の問題との関わりを目で見て分かる形にすることである。合宿では、メモ用紙を台紙に張り付け、それを眺める作業がそれにあたる。行為的理解とは主体化に関する問題で、それは問題群の関係を身体動作化する作業である。つまり、言葉になった状態で理解すると同時に、言語化・視覚化する以前の状態で理解する（感じる）ということ、あるいは客体化した問題を主体的に理解するということである。これは、調査（フィールド・ワークとしてのゼミ活動）を基本として書く、張り付けるという作業（行為）に関係する。発想法とは仮説創造の方法である[2]。

川喜田はＫＪ法を「野外科学」の必要性から考案し、「移動大学」の経験において発展させたのあるが、次に「理解すること」を中心に考えてみたい。彼はＫＪ法において、問題（世界）そのものの理解（分かること）を重要視しているが、そのために、野外科学的方法を取るのである。では、このような事柄の理解は、どのような仕方で行なわれるのだろうか。和辻哲郎は、『人間の学としての倫理学』の中で「わかること」について分析している[4]が、そこで「物のわかった人」の「ことのわけ」を通じて倫理そのものに触れようとする[5]。倫理とは、まさに社会共同体の場所で起こることである。従って倫理を「わかること」は、共同体の理解なのである。トゥアンは、社会共同体における生活を行なう上で、空間の能力を必要不可欠であるとし、そのような空間の能力を空間の知識と区別したが、それが言語的分節化以前のレベルで働いていることを述べている[6]。私たちの社会における問題も、言語的分節化を受ける以前の段階で存在している。それを「分かる」ためには、言語的分節化された以降のもの（できあいのもの）についてのみ考察するだけではなく、「分けること」と「分けられること」の統合としての「分かれ」の起こる以前のもの（事柄そのもの）についての考察も必要なのである。川喜田はこのような「分かること」の必要を感じ、それを「野外科学」という方法で行な

おうとするのである。従って、環境破壊や諸々の問題についての解決の糸口を探るためには、問題や事柄そのものの理解が必要であり、それによって発想もうながされるのであり、調査、言語化、理解、発想の方法がこの場合、ＫＪ法なのである[7]。

３．ＫＪ法と移動大学

次にこのようなＫＪ法が今回の合宿でどのような役割をはたしたかを、川喜田の「移動大学の試み」を手掛かりに考えてみたい。彼はＫＪ法を前記のように「野外科学」の必要性から考察したのであるが、さらにそのＫＪ法を「移動大学」という集団運営の経験から発展させている。移動大学は、1969年に行なわれた第一回黒姫移動大学が出発点となった。ここでは一貫して「野外科学的方法」が用いられ、さらにテーマを追及しその結論がでるまで考察するという姿勢がとられた[8]。集団の編成は、六人を１チーム、６チームを１ユニットとして３ユニット、計108人を上限として行なわれた。この108人＋スタッフで、二週間テント生活をしたのである。このような移動大学の試みは「文明の体質改善に挑む」ために行なわれたのである[9]。川喜田によると、現代文明は環境汚染などの「環境公害」、人の心の荒廃としての「精神公害」、組織が人間疎外の状況をつくりだす「組織公害」の三公害によっていきづまっているとされる。移動大学は、このような状況の解決について考えるため考案されたのである[10]。こうして始まった移動大学は、組織構成や方法論などは未解決であったが、その解決も移動大学において模索するという形で進められた。そのとき問題となったのは、次のような点である。まず組織に関しては、それが単なる心情高揚運動に終わってしまったり、新興宗教的エクスタシーを形成する傾向があるということである[11]。他方、方法論に関しては、取材方法の確立が問題となった。前者については、集団のシステムについて考えたり、ルールの設定、また問題解決を移動大学の基本方針とすることによって解決された。そして方法論は、フィールドワークを中心として行なわれた。それは、彼の言葉によると「鋭い観察は単位化と名づけから」「個体識別と座標軸的知識を相補的に発展させる」「できあいではなく現場から同定の力をつける」[12]という方針で行なわれたが、そのためにＫＪ法をその取材方法の要として使ったのである。このような移動大学は、私たちのゼミ活動と同じものではないが、その基本的考え方は多くの部分を共有しているように思われる。従って、今回の合宿で言語化あるいは理解、発想の一つの方法としてＫＪ法が取り上げられたのは当然であると思われる。

私たちは、谷口先生の指導を通じて、現代文明の抱える様々な問題を研究し、そのとき感じたことを言語化し、またゼミ活動で学んだことを実際の生活で生かせるようにしなければならない。そのとき、言語化などの方法の一つとしてＫＪ法などの方法論を使うことも可能で

ある。さらに、私たちは自分自身の存在基盤としての生活や文化、風習、歴史、風土などについての考察、あるいは言葉の正しい理解や使用、人間や自然についての研究を通して、先生が強調されるように、生命の厳尊や等身大の価値基準、人間らしいより善い生き方、などに常に注意を払う努力が必要なのではないだろうか。

注

（1）フィールド・ワークは、参与観察として後に現象学的地理学へと発展してゆく人間主義地理学で強調された方法論である。

（2）川喜田によると、ＫＪ法とは発想法の一種である。それは「アイデアをつくりだす方法」であり、あるいは「モヤモヤとした情報群の中から、いっそう明確な概念をつかみ出してくる。」という意味合いがある（川喜田二郎『発想法』，中公新書，1967，pp.4-5）。パース（C.S.Peirce 1839-1914）は思考（思惟）の過程、ないし言語化に至るまでの過程について考察する。彼の論理学において推論は、帰納 induction、演繹 deduction、アブダクション（発想法）abduction、の三つに分けられる。そしてこのアブダクションが発想法と訳される理由は次のようなものである。推論においては、演繹や帰納はただ前提となる情報内での結論しか出てこないが、アブダクションでは新しい情報を生み出すことができるとする点にある。

「演繹において前提と結論は必然性によって繋がる。帰納において、前提と結論は、結論を受け入れるかどうかの傾向によって繋がる。ただし、演繹においても帰納においても、前提に含まれる以外の新しい情報は何も生み出されない。それに対して、新しい情報を生み出す唯一の過程がアブダクションであり、一連のデータからそれを説明する仮説を創生する。」ウィリアム・H・デイヴィス『パースの認識論』(1972)(産業図書，1990) p.272 訳者あとがき

さらに、彼は推論全体をアブダクション、演繹、帰納の循環であるとする。

「三種類の推論は、つぎのように探求の三段階に対応する。第一に、アブダクションによって、事実を説明る仮説が創生される。第二に、演繹によって、仮説が説明される。第三に、帰納によって、仮説や仮説の説明が事実に適合するかどうかが検定される。もしもその仮説によって事実を説明できないことが明らかになれば、再び最初のアブダクションにもどる循環を繰り返す。それが推論の全体としての営みにほかならない。」『パースの

認識論』訳者あとがき

パースにおいてアブダクションとは、与えられた情報から新しい情報を生み出す唯一の方法なのであり、そしてそれは創造性の問題に関係しているのである。

「（アブダクションについて考察することによって）われわれの関心は新しい洞察の必要性へ向けられる。…略…あまりにも長く無視されてきた（あまりにもむつかしいため）、あまりにも長くあざけられてきた（恐れられたため）創造性の問題に関心を向けさせる。」『パースの認識論』pp.43-44

川喜田は以上のようなパースのアブダクションとＫＪ法が本来同一の立場にあると述べている。

「パースが取りあげたアブダクションという言葉の意味あいと、アイディアをつくりだす発想法として私が考えているものとを対比してみると、主要な点では、まったく同じところを問題にしているようである。」『発想法』p.5

このような発想法としてのＫＪ法は「野外科学」の必要性から実学的に作り出されたのである。

（３）川喜田は学問を「書斎科学」「実験化学」「野外科学」の三つに分けて考えている。そしてＫＪ法がこの「野外科学」と深いつながりをもつと述べている（『発想法』p.6）。その特徴は、書斎科学との比較においては、書斎科学は野外科学より文献と推論を重要視する点が挙げられ、実験科学との比較においては、実験科学では仮説の「検証」に重点が置かれ、野外科学では仮説の「発想」に重点が置かれるとする（『発想法』p.8）。このような野外科学は、「場の科学」ないし「現場の科学」であるとされる（『発想法』p.14）。さらにこれら三つの科学の関係は、排他的な関係ではなく相補的な関係であるとする。

「われわれが足もとの『一仕事』を完全にやるときには、すでにこの三つの方法のすべてが必要なのである。」『発想法』p.21

（４）「実際生活において『もの』のわかった人は、（理論的な反省をすることなしに）また『こと』を分けて話すこともできる。」p.153

（５）「倫理学と、実践的行為的な『わけ』との間には、すでに『ことのわけ』が介在し、さらにかく『こと』を分けて話すところの『物のわかった人』が、従って物がわかるということが、介在する。これらを通じなくては学としての倫理学は倫理そのものに触れることができぬ。」p.153

（６）「生活していくうえで空間の能力は不可欠であるが、言葉やイ

メージによる象徴的な分節化というレベルにある空間の知識は、生活に必要不可欠ではない。…（そして）…空間の能力は空間の知識に先立つ」のである。ｲｰ･ﾌｰ･ﾄｩｱﾝ『空間の経験』（1977）（筑摩書房，1988）p.119

（７）「ＫＪ法は、狭い意味でいうと、ラベルにデータを書いてから、まとめる方法だが、その前に判断のために、フィールドワーク、野外調査が必要である。フィールドワークとＫＪ法が連結されて、ここに判断のためのひとつの方法が成立する。これも広い意味でＫＪ法ということがある。」川喜田二郎『ひろばの創造』（中公新書，1977）p.36

（８）『ひろばの創造』p.18

（９）　同上　p.6

（10）　同上　pp.6-8

（11）　同上　p.40

（12）　同上　第三章

ＫＪ法を体験して

甲南大学　文学部　三回生　松本　昌樹

今回、春合宿において「ＫＪ法」というものを、その場で方法についての簡単な説明を受けただけで体験することとなった。テーマは「現代の環境と医療の諸問題」という幅の広い、少し漠然とした感じのものだった。私たちのグループでは、意見を書いたカードを出し終わって、討論、まとめの段階で環境問題と医療の問題とを一度分けておいて、最後につなげるという方法であった。私は環境問題のほうの分担だったので、それについての意見をまとめてみよう。

まず、グループの各人が一番最初に書いた意見は、現代の環境問題の全般に対するもので「環境問題に対する関心は、社会的に高まってきてはいるが、各個人内の、自然とともに生かされつつ生きるという感覚の喪失がそれらの問題の根本原因ではないか。」というような意見や、「人間がいかに環境を変えていくかではなく、人間がいかにあるがままの自然の流れに乗るかだと思う。」という意見が主流であった。それに関して、もっと身近で具体的な意見として、下水道の整備の問題、環境と行政、政治家とのつながり等も出された。

他にも、「蚊が多くて困る。」というごく簡単な意見から、殺虫剤の使用に対する個人の考えかたの違いが見られ、そこから「自分たちが何気なく殺虫剤を使用することなどからでも、自然の循環の微妙なバランスを崩す恐れがあることの自覚が大切である。」というような意見にまで発展し、自分の身近な問題もすべて大きなものへと結びつい

ていく、ということを改めて知らされた気がした。

最終的に、グループ全体の中で二つの対照的な意見に分かれた。一つは悲観的なもので、「今の便利で快適な世の中や暮らしを、根本から変えていくことはほとんど不可能だ。」というものであった。もう一つは、「どうにもならないからといって、じっとしているのはいけない。とにかく叫びつづけていくことが大切だと思う。」というものや、「人間には無限の可能性があり、それぞれの生き方にも無限に可能性がある。どんな状況でも、より大きなより豊かな生き方を目指して良い。」という前向きな、積極的なものであった。

最後に、ＫＪ法を行ってみて、個人的に感じたことをまとめてみる。グループ内の各人が、それぞれの思っていることをカードに書いたものを通して間接的に伝える第一段階は、感情的になったり口論になったりはしなかったが、何となくもどかしいような感じだった。また文字に書き、文章にすることで、どうしてもその人の本音にはならず、頭の中で考えを整理してから書くという点で、立て前上の意見になることもあると思う。また第二段階においては、カードの意見をまとめるために、改めて全部の意見に目を通して分けていくことによって、自分個人の考えと他の人の考えとの共通点や違いがよくわかった。私個人について言うと、他のグループの人も含めて皆が、自分に比べ明確な問題意識を持っているのに感心した。

全体的に各グループの最終的な意見として出されたものが「意識改革が重要である。」というものだった。しかし本当に今回のＫＪ法に参加した人々の意見がその通りであっても、そのように理解し合って納得して終わるのではなく、改めて確認したことを、今後いかに実践していくかということの方が大事であると思う。

ＫＪ法Ｂ型（文章化）課題まとめ
～「現代社会における環境と保健医療の諸問題」について～

甲南大学　文学部　二回生　井垣　博美

今回の春合宿で、「現代社会における環境と保健医療の諸問題」という課題についてＫＪ法を行い、図にまとめた。これより以下、私たちの班でまとめたものを文章化したいと思う。

まず臓器移植に関して、最近、日本初の親子間の生体肝移植が行われたため、これを例に考えた。臓器移植はそれ自体、体内に異物を入れることであり、移植による拒絶反応や薬品の投与によって生じる副作用で患者が苦痛を受け、それによって幼少の患者の将来に精神的、身体的に不安材料を与えることが果してよいことなのだろうか。また、幼児のように自己の生死の選択権利を持たないものを、親や医療側の

希望でいたずらに延命するのはどうだろうか。生は死より切り離されたものとして存在するものではなく人の手に左右できるものでもない。臓器移植による延命は、本来の生の意味まで失くしてしまうのではないだろうか。

これは臓器移植に限らず延命そのものへの疑問につながる。人間にとって大切なことは、どれだけ長く生きるかではなく、いかに生きるかということであり、医療の使命はその手助けをすることにあるべきである。しかし、実際は生命を量的に延ばすことにのみ専念し、生命を近代科学にのっとった数値でとらえているのが今日主流となっている西洋医療である。

また西洋医療では、先にも述べたが、化学薬品が治療に使われることも問題の一つである。現在の薬は何らかの副作用を起こす懸念のあるものばかりであり、身体の他の部分を犠牲にしても即効性のみを追求するという姿勢はどうかと考えられる。薬というものはその量次第で毒にも変わり得るのだから。現在でも、医師が小麦粉を特効薬と偽って飲ませ、その安心感で患者の病気を治すという薬のプラシーボ効果が利用されているが、薬には医療が祈祷であった古来より、このように、その成分が身体に作用するのみでなく薬を飲むことで治るのだという安心感を与えるような精神的な暗示効果が含まれている。このことから考えても、現在使用されているような副作用の起こり得る化学薬品に頼るよりも、自然治癒力を再び呼び戻し、生命力自体を高めることこそ大切ではないのだろうか。プラシーボ効果にも見られるように、精神と身体は決して分かたれた存在だとは言えない。デカルトの心身二元論の上に立って精神を優位に、身体を劣位に置き、近代科学の発展によってその身体を精神から離れた化学的物質としてとらえ、患者の身体における生命の尊厳を忘れている近代の西洋医療に、今こそ疑問を投げかける必要があるのではないだろうか。

生命の尊厳を見失っているのは医療の場合のみでない。医療問題を生命体内部の問題と考えれば、今日問題とされている環境問題は生命体内部の問題とも考えられるだろう。そして外界との関係、つまり人と人との関係、人と自然との関係の歪みは、我々の生命体内部の歪みと相互作用的に生じているのではないだろうか。環境破壊について考えても、個人の刹那主義的な快楽の追求と企業の利益のみを追求する姿勢が、何種類もの農薬を散布するゴルフ場問題や生態系のバランスを崩すほどに際限のない森林伐採などの問題を引き起こしている。

例えば、最近のゴルフの流行は日本各地で過剰にゴルフ場を作り、その結果、山が切り開かれ、日本の湿潤な気候には不向きな芝を美しく保つために多量の農薬が使用されて、土壌はもちろんのこと、河川や地下水などの水質の汚染に拍車を加えている。農薬による水質汚染は、農作物への使用のときから既に騒がれてはいるが、PCBやDDTなどの危険な薬品は使用禁止になったり、他のものも使用量が規制されて

はいるものの、その量も地中での残存や、藻、魚、鳥などの食物連鎖による体内濃縮を考えると、安全性がどこまで守られているのか疑わしい。更に、新薬の開発に関しては規制もいたちごっこで、対応は常に後手後手になってしまう。そして、規制されているにもかかわらず、農作物中の残留農薬が最近の流産の増加の原因の一つに考えられているという話すら聞かれるほどに、私たちの生活や生命までもが侵されてきている。たとえ残留農薬の危険性を危惧して有機栽培の農作物を買ったとしても、上流の田畑やゴルフ場で農薬が使用されていれば農薬は作物中に残留しているのである。このような話を聞くと、私たち自身の、そして自然のなかに生きるすべての生物の生命を無視して、いったい何のための農薬、何のためのゴルフ場だろう。

また、ゴルフ場を作る際にも広い範囲の木を切るが、森林伐採は木だけを切ったとしても、それが広範囲に亙ればそこの生態系を大きく狂わせ、多くの生命を奪うことになり、地表は砂漠化する。そして、植物がなくなると、保水力も減退するので地盤は緩み、水は地表を流れ、地下への浸透は極端に減って、地下水脈までも枯渇していく。材木の輸出のために森林を伐採し、植林をしない東南アジアや南アメリカの各地では、現に砂漠化が進み、現地の住民の生活は逼迫している。特に、東南アジアから輸出される木材の多くは日本に送られている。しかし、日本では、発展途上国である輸出国側の犠牲を他所に、それらは使い捨ての建築材や家具、ティッシュ・ペーパーになったり、過剰な包装紙になっているのである。便利さを追求して使い捨ての文化を作り、それが砂漠化を促進しているにもかかわらず、他国内の問題として片付けてしまっている。しかも、その使い捨てによって、日本国内でも新たにゴミの問題が深刻化しているのだ。

このように他人を、他の生命体を、自然を犠牲にしてまでも利益や便利さを追求する浪費社会は、社会の歪みであり、その社会を構成す

ＫＪ法「図解化」のようす

る個人の歪みである。しかし、都市化が進むなか、自然や他の生物と共生することのない外的環境の歪みもまた、同時に個人や社会に生命の尊厳を見失わせているのではないか。現代社会で生活している人間の陥っている最大の病は、生命が生命に支えられていることに対する意識が希薄になり、生命を奪うことの重さと崇高さを忘れかけていることではないだろうか。

以上のようにまとめてみたが、文章化すると改めて図解したときには気付かなかったつながりに気付くなど、まだまだ検討の余地があることが感じられた。また、意見自体もあまり数が少なかったので、他の班とも合わせて考えると更に深まっていくものと思う。

フィンガーペイティングを通して気付いたこと

甲南大学　文学部　二回生　北村　光子

今回の春合宿で、Aグループのメンバーは全員初めてフィンガーペインティング（以下F．P）を体験することになった。その製作過程と、展開、構図、色彩、効果についての感想をまとめてみようと思う。

F．Pはまず、4人で1グループを作り、1枚の画用紙に、絵の具を直接指や手の平でぬり、思い思いの絵を描いていくことから始まった。絵が展開していくうち、個性の表現から次第に、人との関わり方や、集団の中での自己の表現へという変化が見られるようだ。こうしてできあがった絵を乾かし、それぞれがはさみなどを使って切り、もう1枚の新しい画用紙を台紙として、糊を用い、皆んなで一つの立体を作っていく。この立体化した絵は、グループそのものの個性とも言えるだろう。

Aグループの場合、白い画用紙を前に一瞬手をつけるのに戸惑いがあったが、こわごわ絵の具を指に出し、徐々に思い思いの世界を展開させていった。描いているうちに、リーダー的に絵を進めていく人、独自の世界を作る人、調和をもたそうとする人というように、その人その人の色が出てきたが、始めのうちは特にそれぞれが自分の領域を守っていて、他の人の領域に立ち入るのには、時間と勇気が必要だった。時間が経つにつれて、少しずつそれぞれの領域に境がなくなっていった。ひとつの絵に皆んなが好きな色をたしていき、できあがるにつれてうれしさ、満足感が膨らんでいった。直接指に絵の具をつけ、指で描くということがひとつの解放となって、小さい頃に戻ったような気持ちで、自由に描くことができた。また、同じ色彩でも手で描くと絵の具に体温が伝わり、あたたかさ、生命力が色に入り込んだようだった。

色あいは私の班の場合、ほとんどが明るい色ばかりだったのだが、

これにはいくつかの理由が考えられると思う。一つはグループ内の他の人への遠慮、「皆んなで作っている絵をこわしてはいけない」というような意識が強く働いていて、絵の上でも人間関係の上でも、メンバーが本当にうちとけるというところまでいっていなかったのではないかと思う。もう一つに、描いている人の心理状態も強く影響していたようだ。「今、とにかくいい方向にだけ向かいたい」「いい状態だけを見ていたい」というような気持ちが明るい色彩を選んだようなところもあるだろう。

色といい、構図といい、季節で表すと“春”という感じだった。絵は大部分が具象的で、太陽と緑と田園と海が描かれている。背景には白い部分が残り、他の部分との色の重なり、まじりあいは、メンバーの中の限られた人の間で微妙に行われていた。それぞれが自分の領域を守りながら絵を展開させていきつつも不思議と調和のとれたものができあがったが、深いところで解り合うには時間のかかるメンバーだったように思う。この絵をもっと何日もかけて、このグループのペースで完成するところまでとことんつきあってみたいと思った。絵は「楽しいものにしあがった」ということでは全員一致しているが「まだまだ未完成」という気がしている。心的なものの氷山の一角である“春”の部分がこの絵には色濃く表れていたが、ここにはあまり表れてこなかった“夏”“秋”“冬”の部分を共有できるようなところまでいければもっとおもしろいものができたのではないかと思う。

絵を立体化することで、イメージが現実化されたのと同時に、思わぬ立体ができた驚きもあった。立体にしていく時点でそれまでの役割が変化していくのは、“想いを言葉にする表現力”の違いを表しているようにも思えた。

F．Pをしてみて、久しぶりの創造的作業に子供の頃に戻ったような楽しさ、解放感を味わえた。他の人とグループになってすることで、

F・P，Aグループの作品

自分で思いもしなかった「人との接し方の傾向」に気付くことができた。合宿の間の人間関係の動きを端的に表していたようにも思う。何より客観的に自分を見ることができて、何かひとつ解放されたような気がしている。

フィンガーペインティングを体験して

甲南大学　文学部　三回生　平岡　未央

絵の具の感触が指に気持ちよかった。絵の具を指に直接つけて絵を描くのは最初は抵抗があったが、やり出すとなかなか楽しいものだった。色をぬっているときは人差し指だけを使ってほとんど水を使わず、上から上から重ねてぬり、前の色との混じり様を楽しんでいた。色が混ざって汚なくなったらいやだと思っていたけど、やっているとそんなことは気にならなくなって、気の向くままにぬっていた。だいたいが指で円を描くようにぬり、茶系と黒を除く全部の色をたぶきれいだなあと思いながら使っていたという人もあれば、自分の好きな色ばかりの人、そして赤、黄、緑の三色がほとんどだった人もいた。

ぬっていく作業自体について、各人がどのように感じていたかは、それぞれけっこう似ている。最初はグループ全員マイペースで、各自がそれぞれのこだわりを持って描いていた。他の人の模様を描いているところへの侵入は、互いに少し遠慮していた。空間的に別々の領域を各自が持っていたが、その境界がやがて不明瞭になり、それぞれは区別しがたくなった。しかし、特別相手の邪魔をするわけでもなく、かといってそんなに遠慮もしないでやっていたようだ。自分の選ぶ色や描く図形と他の人のものとがひどく違っていたり、他の人と強調して出来る部分と出来ない部分があったりと、個人のそれぞれの特徴がでていたように思う。

初めのうちは、それなりに形にして意味のあるものを描こうとしていたが、最終的には、きちんと形のあるものはなかったようだった。ちょっと遠慮していたので、少しもの足りないままで終わってしまったという人もいれば、箱庭と違って、個人作品ではなく複数の人の作品なのでまとまりが出るかどうかわからなかったが、各人はそれほど意識していないのに、案外まとまった一つの作品として出来あがったという人もいた。

次にその絵を切って貼る作業についてだが、下絵を切って貼っていく時は、一応それぞれが自分の好きなように作っていたが、中心には一つのものを協力して作っていたように思う。絵の具の重ねぬりをやりすぎて、画用紙がパキパキになってしまい思うように貼りついてくれなかったが、自然とみんなの協力体制はできていたと思う。それが

終わるとまたマイペースで、絵の時と同じ感じだった。はじめて下絵にハサミを入れる時は少し葛藤があったが、あまりあれこれと考えずになんとなくペタペタやっていた。絵を描いた時もそうだったけど、昔にかえったようにハサミで切っていたらうれしくなってしまった。

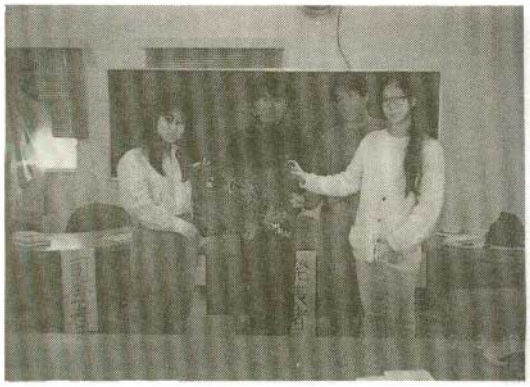
ところで、二回目の作品が立体になるのはなぜだろうか。平面でもまったくかまわないのに‥‥。

作品がまとまりを持つのは、絵を描いたり、紙を切ったりする方法のパターンが全員に伝わり、それがまとまりをつくっているのではないかと私は考える。

フィンガーペインティングの感想

甲南大学　文学部　四回生　榎本　修一

絵の具が画用紙の上を走った。その瞬間、私たちの班のあの忌まわしい絵が作られていったのだ。絵を書くということが、自我の放出になるというなら、四人のうち他の三人の存在ほど嫌なものはなかった。つまり己の感覚とは全く別の意識の流れがそこに現われ、いやがおうでも相手の存在を認めなくてはならないからだ。四人の感想文も「我我のCグループはほとんどの絵の具を使い果たして、どす黒い色をぬりたくったのですが、別に全員がエネルギーを発散したという訳ではありませんでした。」また「久しぶりに絵の具にさわると何かしら美しいものを描きたくなった。でもやっぱりそれは空しい希望となり、次に訪れたのはいかに自己主張するかであった。侵略、征服、防備のバトルロイヤルである。」「色をぬっていく段階ではとにかくおもしろ



F・P，Cグループの作品

くてやりたい放題やってしまった。だんだんと色が濁っていって最後にはそれぞれの世界を創って終わったという感じだ。」という具合である。

このペインティングの間では、それぞれの個の破壊と共に再生があったと思う。我々のグループではそれがうまく行かなかった訳だが、それでも破壊と再生のドラマはあったのだ。グループのひとりはこう言う。「感情を色で表現しようとして、青系統の色を出し続けた。するとその青黒い中に赤い目が欲しくなった。それは個々の個性がぶつかり合う一枚の画用紙に四人が四人とも経験したことだ。寒色、暖色、そしてまた寒色。いつのまにか画面はカオスとなり、色はなくなった。純粋の黒ではないくぐもった色、そこで初めて四人の形が生まれた。」

ここでも示されているように、自我の強い人間が集まったとき、画面には混沌とした闇しか残らない。しかしその闇の上に重ねるように四人の個性が生まれた。あるものは情念の炎のごとき赤を書き、あるものは黄色いサークルの中に反対色の青を落とす。またあるものは闇の中に目を創り、そしてあるものはマーブル形の厚みのある色の中に生命力を感じた。他のグループはすべて中央に円い太陽のようなものがあった。その調和、協調性は我々のグループにはなかった。しかしこの闇の上に浮き上がった個性がぶつかり合いながらもバランスを保っているのは面白い。

そしてその絵を切り離し、他の紙の上に載せてゆく時、四人の個性が湧き上がった。

個性の湧き上がった作品は、中央に高い塔が立つ。さらにそれに巻きつく切れ端。闇の中、絵をバラバラにした一部がリンゴの皮のようになっているのだ。まるで夢の島のごとき作品。

グループの一人は、「翌日の切り貼りについては、それぞれが相手の作った部分を勝手に利用しながらいくらか建設的なイメージが表現

F・P，Bグループの作品

されたと思います。やはりそうなるとそれなりの満足もでき、何かを作るという面白さも味わえ、カタルシス効果もあったと思います。」という感想を述べた。

F・P完成直後

II

第二十一回ゼミナール合宿（夏季）

神戸新聞

平成2年(1990年)5月11日　金曜日

サルの調査をする研究班＝淡路島モンキーセンター

ニホンザルのスギ花粉症

淡路島モンキーセンター

人間治療の手掛かりを！

日本獣医畜産大の研究班

血液の採取や抗体検査に着手

ニホンザルのスギ花粉症を研究している日本獣医畜産大＝東京都武蔵野市＝の和（にぎ）秀雄教授ら研究班が十日、淡路島モンキーセンター（洲本市畑田）のサルの血液採取や抗体検査を始めた。和教授は「サルのスギ花粉アレルギーを解明することで、人間の症状を治す手掛かりが得られたら」と話している。

研究班は、和教授と同大の学生、農水省農業生物資源研究所の研究官ら十一人。同大学グループと、京大霊長類研究所が約五年前広島県・宮島で、スギ花粉症にかかっているサルを見つけて以来、全国の野猿公園や動物園など約百カ所にアンケートを実施し、十カ所で現地調査をしてきた。

同モンキーセンターでは午前八時半から、麻酔の吹き矢を使ってサルを捕獲、妊娠中の雌ザルの子宮内を超音波診断。雄ザルには精液検査を行ったほか、すべてのサルにIgE（免疫抗体E型）を皮膚に注射し、皮膚表面の反応によって花粉症を診断した。正午までに六匹を捕獲、このうち、明らかに花粉症と認められたのが一匹、疑いが強かったのが一匹という結果だった。調査は三日間行われ、採取した血液は、同大学に持ち帰って、検査を行う。

和教授は「スギの植林奨励という過去の政府の林業政策が日本人特有といわれる花粉症を生んだ。サルの花粉症の治療方法を確立することができれば、日本の総人口の一割といわれる患者の治療の道も開けるのでは」と話していた。

（神戸新聞　1990年５月11日より転載）

さよならコータ

イモを送り、はげまし続けた小原小（滋賀県甲賀郡信楽町）のお友だちがお別れの手紙

ことし一月三十一日の夜、淡路島（兵庫県）で一ぴきのニホンザルが死にました。コータ（おす、九歳）で生まれつき両足と両手首がないサルでした。墓にはひとたばの手紙がうめられました。「がんばれ、コータ」とコータをはげましつづけた、滋賀県甲賀郡信楽町の小原小学校のお友だちからの手紙です。

「心の中に生き続ける友だちだったんだ」

コータは昭和五十五年に、淡路島モンキーセンターで生まれました。同センターでは昭和四十二年に開園してから毎年、手足などに異常をもったサルが生まれていましたが、コータはその中でも最も厳しい障害をもっていました。手足がないために母ザルの乳をうまく吸えず、何度も山の斜面をころげ落ちて体はきずだらけ。所長の中橋実さん（六十六歳）は「このままでは死んでしまう」と、コータを自分で育てることにしました。

子ザルのころのコータは、不自由な体をろがせてはしゃぎまわるいたずら坊主でした。食事もふろもねむるのもいっしょという中橋さんとコータの生活は、テレビや新聞などでも紹介され、そのようすは、障害の原因とみられる農薬の害をうったえているようでした。

昭和五十九年、小原小ではPTAのお母さんたちが中心になって、「食生活を見直そう」という運動をはじめました。食品にふくまれている残留物などがはにあたえる害を軽減するために教材となったのがコータのことでした。「みんなでつくった安全なサツマイモを、おサルさんに食べてもらおう」ということになったのです」というのは農業委員会。こうして小原小とコータの交流がはじまりました。

それから毎年、サツマイモを植えることになると、コータと中橋さんに手紙が届くようになりました。「コータくん、元気ですか。ことしもおいもを植えましたよ」。小原小のお友だちひとりひとりが書いたものです。秋の収穫がおわると、小原小では「コータのつどい」が開かれます。イモといっしょに送る手紙をみんなが熱心に、奥島先生が作った「コータの歌」を歌います。そのころの「週間」は「コータ週間」で、ろうかに「コータへのプレゼント」とかいた紙がおかれ、お友だちがつくったざぶとん、ぬいぐるみ、アクセサリーなどでいっぱいになります。「ことしは寒いのでこれをつくりました」というお友だちもいました。

手紙とともに、ちゃんちゃんこをおくるお友だちもいました。

「同じ生きものだもの」

二月一日、小原小の三年生以上のお友だちはスキー教室に出かけた先で、悲しい知らせを聞きました。「コータが死んだ」と聞いて、「えーノ」って顔を見合わせました。みんな悲しい顔してた」というのは杉本彩さん（六年）。坂本雅早くん（六年）は、全校を代表して手紙を書きました。「コータは、ぼくたちの心の中で、一生生きつづけていきます」

コータに会ったことがあるお友だちは坂本くんをふくめ、ほんの数人しかいません。それでも小原小のお友だちは、コータのことをほんとうの友だちのように思っています。「わたしたちと同じ生きものですから」と、松井裕さん（六年）は、いいました。

「コータと小原小のみなさんは、わたしの先生です」と中嶋さんはいいます。すべての生きものと「ともに生きる」という姿勢。それを教えてくれたのは、コータのけなげな姿と、コータをはげましつづけた小原小のお友だちというのです。

コータが死んだあと、小原小からのイモのプレゼントはどうなるのでしょう。

「やめへんよ。これからも送って、ほかのサルに食べてもらうもん」という杉本香織さん（二年）のことばは、小原小のお友だち全員の気持ちです。

◇サルの障害◇

昭和三十年ごろから、全国のメスザル（人間がえさをあたえているサル）の群れで、手や足の先がない、指の数が多い（あるいは少ない）、骨がまがっているなどの障害をもつサルがふえはじめた。これらのサルを調べ、母ザルのおなかの中にいる胎児が、ほぼ一〇パーセントになるくらいの障害があった。

農薬に汚染されたサルのうち約二〇パーセントになるくらいの障害があった。

（朝日小学生新聞　1990年２月22日より転載）

２．日　程

第二十一回ゼミナール研修旅行のお知らせ

軒下の風鈴の音が涼しく響く季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年の夏もまた、谷口研究室ではゼミナール旅行を下記の通り計画しております。今回は、もう一度原点に立ち戻って環境問題を考えるために、淡路島モンキーセンターを訪問し、中橋 実所長のお話を伺い、奇形猿に関する記録を取るほか、宿泊先の真言宗・千福寺ご住職に講演して頂き、また、同寺においてヨーガを体験する予定です。奮ってご参加ください。

甲南大学　文学部　谷口研究室
１９９０年７月１２日

～　～　～　～　～　～　記　～　～　～　～　～　～

日　時　予　定：集合　8月6日（月）　甲南大学正門前　AM.8:30
連絡先　☎030－16－98278
解散　8月9日（木）　ＪＲ須磨駅　PM.6:00

携　帯　品：参加金、着替え、運動靴、常備薬、保険証コピー、学生証、洗面具、筆記用具、水着、懐中電燈、虫よけ、運転免許証、帽子、雨具、その他
◎ヨーガのできる服装（ジャージ等）を用意して下さい。

研　修　先：淡路島モンキーセンター　☎(0799)－29－0112
千福寺　☎(0799)－22－3309

参　考　文　献：中橋 実『がんばれコータ』（長征社）
鎌田茂雄『般若心経講話』（講談社学術文庫）
佐保田鶴治『ヨーガ入門』（池田書店）
佐保田鶴治『ヨーガ禅道話』（人文書院）

スケジュール：8月6日（月）ヨーガ、ご住職講演
（予定）　8月7日（火）モンキーセンター訪問、中橋所長による説明
ヨーガ、卒論中間発表
8月8日（水）モンキーセンター訪問
卒論中間発表
8月9日（木）リクリエーション

宿　　泊　　地：6日・7日　兵庫県洲本市栄町4－5－51
千福寺（ユースホステル）
☎(0799)－22－3309
8日　　兵庫県洲本市畑田289
淡路島モンキーセンター（民宿）
☎(0799)－29－0112

費　　用：25000円（予定）

申し込み方法：7月28日までに電話またはハガキ（氏名、住所、電話番号、大学名・勤務先を明記の上）で下記にお申し込みください。

送　　り　　先：〒658　神戸市東灘区住吉山手3－7－11－102
井垣　博美
☎（078）－843－1905

問い合わせ：ゼミ旅行幹事
井垣　博美　☎（078）－843－1905（下宿）
☎（0792）－69－0107（自宅）
北村　光子　☎（075）－956－5705
谷口　文章先生　☎（07712）－3－9464

千福寺　山階宏泰住職と共に

3．夏合宿の解説

「内なる環境汚染が、外なる環境汚染をもたらした」という命題を考えるため、本年度のゼミでは精神病理学の『人と人との間』（木村敏 著）と身体論の『〈身〉の構造』（市川浩 著）を理論面で研究してきた。他方、夏の研究旅行では、心身二元の立場ではなく心身一元の立場を実践するため、淡路島の千福寺で渡辺昧比氏の指導によるヨーガの実習をおこなった。

「身体」を頭で理解するのではなく、まさに“精神としての身体”を体験したのであった。そうして「内と外」の環境が同じものの別の視点にすぎないことを理解した。

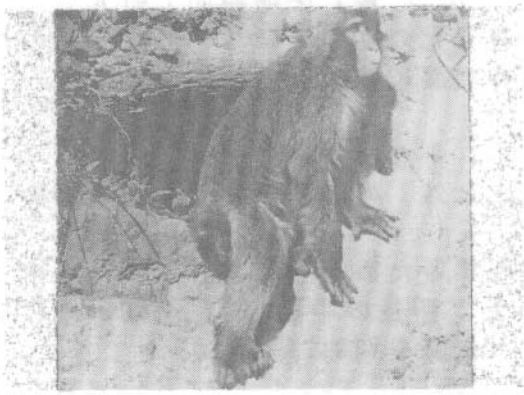
他方、現実の環境破壊の状況を調査するため、七年ぶりに淡路島のモンキーセンターを訪れたのであった。所長の中橋 実氏と御家族の皆様にお世話になりながら、充実した記録をVTRに残すことができた。しかし、前回に会えたコータは一月に死去していたため再会できなかった。さらに残念なことに、第二、第三のコータが生まれていた。「奇形ザル問題」は止まることをしらない無間地獄であろうか。

ところで、人間の適応能力は考えられている以上に大きなものがある。例えば、零下15°Cにおいて最初は耐え難い寒さも、零下40°Cの極寒地の生活を経験すれば、むしろ服を脱がざるをえないほど暖かいものである。これはプラスの適応例である。それに対しマイナスの適応例として、人々は重度の障害をもったサルたちにはショックを受けながらも、くり返し示されると鈍磨し無感覚になる。これも一つの適応能力である。しかし、このように感性を硬化させることで問題を排除することは、根本的解決にならない。

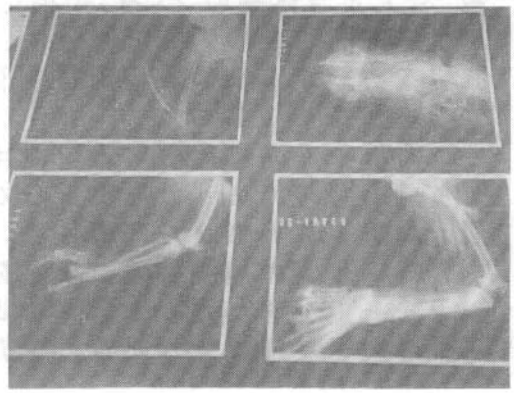
この意味で五官を通じた「共通感覚」の覚醒が要請されるのである。つまり、現実の環境破壊の状況をくりかえし見据え、それが内化するまで忍耐し、感性のアンテナを働かせつづけながら、十分に「関係の網の目」を形成する必要がある。そのとき新たなネットワークができ、有効な形で現実に外化しながらアクションしていくことができよう。

4. 記録写真

奇形の部位

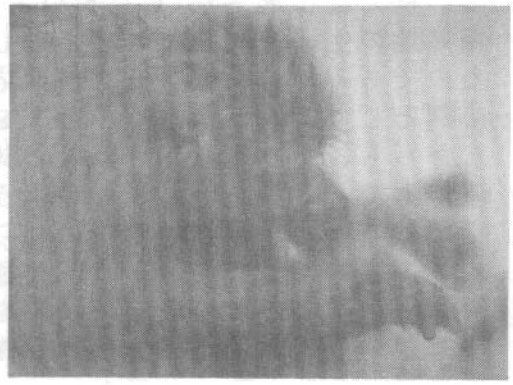


ミラーフット（資料館より）



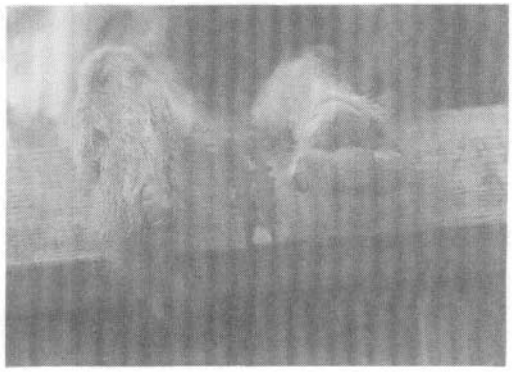
奇形部位のレントゲン（資料館より）

ケージに保護された重度の奇形ザル



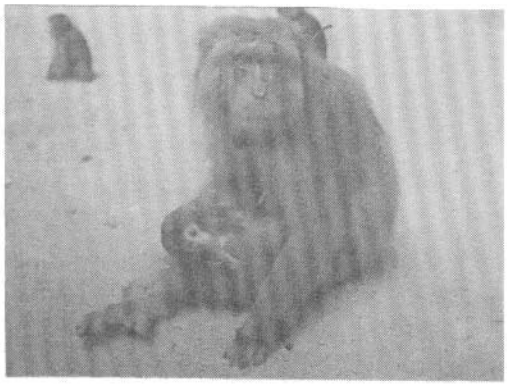
欠肢（左手前）と裂手（右下）

裂足（左）と欠指（右）



左同

新生児（1990年生まれ）



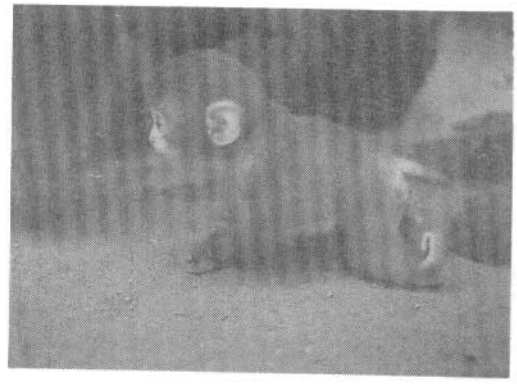
ハート（0才 1990年生まれ オス）

フミコ（0才 1990年生まれ メス）

ハート

フミコ

フミコ



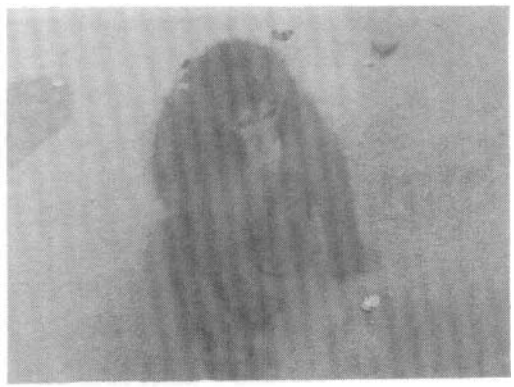
フミコ

自然の中で生きる成獣

ミナト（5才 1985年生まれ メス）

メグ（3才 1987年生まれ メス）

ミナト



メグ

ミナト

メグ

5．研修レポート

現代人の「見方」についての考察
～淡路島モンキーセンターでの経験を手掛にして～

甲南大学　文学部　研究生　天野　雅夫

1990(H2)年夏、私達は淡路島モンキーセンターを訪れた。本ゼミでここに来るのは二回目であるが、その主な目的は奇形ザルの発生原因の追求と、自然破壊の現状についての観察であった。とはいうものの、こうして二度にわたって訪れた理由は、なによりも所長の中橋実氏に再度お会いしてその人柄に触れるためであった。その年は、中橋所長が「コータ」というサルとすごした生活や、所長の自伝などを記した本『がんばれコータ』が出版された二年後であり、その「コータ」が死んだ年であった。

淡路島での奇形症状の出現は、1967年に中橋氏が島で開園される以前からあったようだが、記録として残っているのは1969年の「ミラーフット」が最初である。その後、1970年には新生児12頭のうち８頭の手足に、1971年には生まれた14頭のうち12頭に奇形が見られた。1972年から1974年にかけては減少傾向にあったが、それ以降も年に数頭が障害をもっていた。そして、1980年に「コータ」が生まれ、現在まで大きな変化なく至っている。

モンキーセンターに到着したのは午前九時頃であった。始め騒がしく聞こえた蝉の鳴き声も山の中に入っていくに従っていつの間にか気にならなくなり、雑木林の景色とサルの戯れる姿が違和感なく眺められるようになった頃、中橋所長が資料館の中から出て来られた。「どうも御無沙汰しております。」と口火を切った谷口先生の言葉に、所長は「やあ、いらっしゃい。」と快く歓迎してくださった。久しぶりの対面にもかかわらず、先生と所長は早速本題に入られた。

最初に見せられたのは、冷凍された母親ザルであった。そのサルは丁寧に青いビニール袋で包まれ、そして冷凍庫に入れられていた。これらは原因追求のための研究を目的として保存されているが、資金不足のため十分な研究もされずにそのままになっている。資料館に入る前に、ホルマリン浸けの「ミラーフット」を見せて頂き説明を伺った。

奇形の原因については、現在のところ確定した説はないが、それが餌付開始と関係して発生し、日本の高度経済成長がピークに達した1971~2年頃全国的に異常発生していることから、これらとの関連が指摘されている。遺伝的要因に関しては、1978年から1980年に行われた染

色体異常に関する血液検査、交配実験、伴性遺伝の調査などによってその関連性が低いことが報告されている。その後、奇形ザルや奇形を生みやすい母親ザルの体内に健常の数倍から数十倍近い農薬が残留していることから残留農薬についての調査が行われるようになり、こうした理由で1981年から1983年の調査では環境要因に重点が置かれ、現在の民間による調査でも環境要因がその主な調査対象となっている。

資料館の中にはサルたちの写真や説明のパネルがたくさん貼ってあり、奇形発生の原因についての仮説や、その経過、さらに公害問題、環境問題、自然破壊の現状が分かりやすく解説してあった。そんな中でお話しを伺い数時間が過ぎた頃、所長は次のように語られた。「21世紀はバラ色じゃない、滅びなんだ。環境を破壊してでも経済を優先するか、環境を最優先にするか、この二者択一しかないのです。」と。

私たちは午後から資料館を出て実際にサルたちを観察することになった。所長やご家族の方々に解説して頂き、サルの見分け方、名前や習性を少しづつ理解していくうちに、個体識別ができるようになり、より身近にサルたちを感じられるようになっていった。その時、山の斜面をトコトコと二足歩行をして降りて来たのは「ミナト」(5才メス)だった。

中橋所長によると奇形ザルを見た人は、一般的に同じ反応、つまり次のような「見方」をする。それは、自分の目の前にある奇形ザルを対象化し、自分の側を正常、奇形ザルの側を異常とし、その間に明確な線を引くという「見方」である。これは「見る者」と「見られる物」との分離であり二項対立の関係である。こうして見られた奇形ザルは単なる「物」と化し、苛酷な自然環境の中で真剣に生きている奇形ザルたちの激しい「生き様」はまったく無視されてしまう。それと同時

資料館にて　中橋さんと

に、本来加害者であるはずの人間自身の罪をも帳消しにしてしまうのである。さらに、この対峙した関係に人間中心的価値が混入する。つまり、自分の側は優位、奇形ザルの側は劣位に当てはめられる。そして、そこから劣位のものを排除するという考え方が生まれてくるのである。しかし、奇形ザルがどうして劣位なのだろうか、もし仮に現代文明の中で生きている私たち人間が彼らと入れ代わるなら、私たちはあの厳しい自然の中で生きてゆけるのだろうか。彼らが劣位にあるのではなく、またそれを排除しようとするのではなく、むしろこうした偏見に侵された人間の「見方」を排除し、彼らを私たちの規範としなければならないのではないだろうか。中橋所長はこのことについて『がんばれコータ』の中で次のように述べられている。「私たちがこの地球上に実現させたい社会というのは、先天性異常とか奇形、あるいは障害といったことばで識別し、その存在そのものを否定するような社会ではなく、そうしたことばが全く無用で意味をなさなくなるような社会です。そのためには、やはりいのちあるものはすべて平等なのだというところまで、意識を改革していく必要があるのです。」氏は、一方でこのような「見方」に注目しながら、他方で「環境」についても警告をしておられる。それは、現代社会に生きるすべての人々に対しての警鐘である。「すでに私たちは安心して飲める水もなければ空気もない、食べるものもしかり、という現実の中に生きているのです。…この現実は…人間の生存基盤である生活環境が崩れ、冒されているということにほかならず、このまま行けばおそらく人類に未来はないのではないかと真剣に考えざるを得ません。」「（現代において）『ともに生きる』という言葉はよく耳にするけれども、現実には自分で自分のいのちを否定し、自分で自分の首をしめているというように思えてなりません。そんな見方をすると、オーバーな表現かもしれませんが、確実に人類は滅びゆくというふうに考えざるを得ないので

資料館にて資料を見る

す」と。このように、私たちは合宿において、人間の態度としての「見方」の問題、人間の生存基盤としての「環境」の問題を学び、そして何よりもそれらの統合としての、中橋所長自身の「生き方」を学んだのであった。

サルたちは、夕方4時頃山に帰って行く。初めは一匹また一匹という具合に斜面を登っていき、次第にゾロゾロと帰って行く。ボスザルは周囲を確認しながら、母親ザルは赤ん坊を抱きかかえ、子ザルたちは遊びながら林の中へ消えてゆく。そんな中で障害をもったサルたちも仲間に見守られ帰って行く。サルたちがすべて帰ってしまうのは五時過ぎ、まわりはすっかり暗くなっている。見上げると、空は夕日で真赤に染まっていた。

真の意味での共存とは?

甲南大学　理学部　四回生　辻　孝司

「共存」という言葉が使われることがよくある。例えば「自然との共存をはかり、住みよい環境づくりをしよう。」といった具合に使われているが、この「共存」という言葉の意味をある辞書で調べてみると、「自分も他人とともに生存すること」と記されていた。しかし、現在我々が口にする「共存」が本当にこの意味で使われているのだろうか。今日の日本の経済発展は戦後最大と言われるほどの好景気だそうだが、最近よく言われるようになった酸性雨などによる環境破壊など、自然界を犠牲にしてできた今の我々の繁栄状態で果たして全世界の自然や人々と「共存」しているといえるのだろうか。我々が口にしている「共存」とは本来の意味で用いているのではなく、人間独特の主観性が入ったうえでの「共存」といえる。

例えばごく最近のものとしては、犬や猫などのペットが挙げられよう。最初のうちはかわいがっていても、鳴き声がうるさいからといって保健所へ連れていったり、外科手術で声が出ないようにしたりすることがある。又、中橋さんの著書『がんばれコータ』の中にも、「野荒しといっても、もともとサルたちの生息場所であった山の中に人間がはいり込んで行って～（中略）～それまでの自然界の平衡が崩れ、野生動物たちの食べ物が少なくなったという事情を見逃すことはできません。～（中略）～人間本意にしか見えないために『有害』だという理屈がまかり通ってしまうのです。」と記されているように、人間が自分以外のものに対し自分の考えを押し付けているにすぎない。中橋さん自身も、餌づけしたサルに奇形が生じるのを見るうちに深く悩まれた時期があったと思う。それを克服して運営されている淡路島モンキーセンターの姿を見ることができたのはよい経験になった。

さて、淡路島モンキーセンターには後日取材という形で訪問したのだが、山から降りてきたサルたちの姿はとても生き生きして見えた。そして僕は写真等でしか見たことがなかった奇形ザルが、とてもハンディがあるとは思えないほど明るく元気に動き回っている姿をまじかに見て、自然界で生きる野生動物たちのすばらしさを感じると同時に、彼らが我々にまるで何か訴えかけているような気がした。「あなた方の住む世界が徐々に破壊されつつあるということをもっと知ってください。」とさえ言っているようだった。本当は我々がそれに応えてやらなければならないのに、いまだに自分の営利のみを追求する傾向にある。それが人間対自然のみならず、人間対人間という形でも行われているのだから何ともあさましいことである。又、生き生きとした姿をしている奇形ザルたちに「奇形」という呼び方は決してあてはまるものではないと思った。「奇形」という言葉がかえってサル達に対して失礼だとも思える、そのような言葉による表現そのものが、「サルに起こっていることだから我々人間には全く関係のないこと。」といった無関心な人々の意見を生み出す源になっているのかもしれない。言い方をかえるとこれもまた、人間独自の主観性によるものといえるのではないだろうか。

ところで、肝心の奇形の原因はいったい何なのだろうか。これについては今までに色々と言われてきているが、僕自身が考えるところでは、やはり餌づけ用の餌についていた残留農薬が第一だと思う。淡路島モンキーセンターのような野猿公苑のサルはもともと野生のサルであり、野生の状態では奇形が生じるとは考えにくいし、生じたとしてもそれは何らかの突然変異体の可能性が高い。その野生状態での自然環境以外で外から来るものといえば、餌づけという形による人間の介入に他ならない。この条件がなければサルの生活環境はそれまでと何ら変わりはないはずである。もちろんこれだけが原因だと言いきれる

フミコ

わけではないが可能性としてはかなり高いと思う。

しかし、このようなことがサルなどの野生動物の世界のみならず、人間界においても実際におこっているのは非常に嘆かわしい。水俣病をはじめとするいろいろな公害問題は、自分のみの利益しか追求しようとしない一部の人々によって自然界に撒き散らされた毒物により空気や魚などが汚染され、それを体内に取り込んだ人々に様々な身体異常が発生したためにおきたものである。そしてやはり、このことに無関心な人々があまりにも多い。これでは奇形ザルの問題にも無関心な人々がいてもおかしくはない。でも、このままでは地球上の生き物全てが滅びゆくのを黙ってみていることになってしまう。親しくしている人達のことを大切に思うのと同じように、それ以外の人々に起こっていることに対しても少なからず関心をもつことができれば、何か行動に出ると思う。サルに対しても同じことではないだろうか。たとえ人間ではなくともサルたちに起こったことを己の立場で考えてみれば、やり方は違っても何か行動に出るはずだ。まして、人間に最も近い動物とさえいわれるサルである。「サルだから無関係」ではなく、「サルだからこそ大いに関係あり」と見るべきではなかろうか。これらのことは全て、「相手に対する思いやりの心」という、誰もが持つものから生じるに他ならないと思う。中橋さんも、サルたちのことはもちろん、御自身の病院生活体験から身をもって感じたからこそ、広く一般の人々に訴え続けておられるのだ。その心が相手と実際の状況は違っても、相手と同じ立場に立って考えられる一つの糧になる。すなわち、これこそが先にもふれた、真の意味での「共存」をなし得ることにつながり、中橋さんがおっしゃる「共に生きる」ということにもつながるのではないだろうか。その「共存」を本当に理解するために、まず我々が自然界に対して行ってきた悪業を深く考え直す必要があると思うのである。

フミコ

淡路島のサルたちの自然な姿にふれて
～生命の連なりを知ること～

日本女子大学　家政学部　四回生　小谷　泰子

私たちが動物園や公園で目にする動物は、無気力で寂しそうに、また“いかにエサを食べるか”ということのみを考えているように見える。動物は、人間のテリトリーに組み込まれてしまうと、本来の持ち味を失ってしまう。人間によって産み出された、そのような動物たちに、私は親しみを持てず、どちらかというと敬遠していた。しかし、淡路島のモンキーセンターで出会ったサルたちは全く違っていた。

センターの門をくぐって坂を少し登っていくと、光が降りそそぐ木木の下で、のんびりと暮らしているサルたちが眼に入った。彼らはグルーミングをしたり、寝そべったり、木に登って遊んだりと、私たちの訪問にもかかわらず自分たちの生活を楽しんでいるようだった。

人間を含む全ての生物は地球上で共に生きているが、ユクスキュール（J.J.Uexküll 1864-1944）に指摘されたように、それぞれの生物にはその固有の世界がある。私たち人間は、時折その世界を垣間見ると、未知なものの発見について新鮮な驚きを感じる。すなわち、人間以外の生物も、私たち人間に支配されるものでなく、私たちと同等な存在であるということの確認である。モンキーセンターのサルたちとの出会いも、まさにそうだった。サルたちは自分たちの生活スタイルを守り、人間の世界に取り込まれながらも管理されていない。彼らは、秋の実りの時期、完全に野性に戻る。淡路島の豊かな自然と中橋所長の人間性が、サルたちの自然な姿を守っているようだ。

また、淡路島のサルは非常に序列が穏やかで、円満な「福祉社会」を形成していると報告されている。例えば、障害をもっているサルは、グルーミングのお返しを免除される。実際、障害をもつサルは、普通のサルと同じように自己を主張し行動しているので、どのサルが手足に奇形をもっているのかすぐには気付かなかったほどである。「ここに生まれてよかったね」と私はしみじみ思った。しかし、合宿に参加する前に感じていた悲惨さとは全く逆の実状に、救われる気持ちとなった反面、やがて奇形問題が生物全体に広がるのではないかという危惧がますます深まった。この原因が何なのか、私は非常に興味をもった。

原因として主に考えられているものは、農薬である。奇形ザルをよく生むメスザルの肝臓や腎臓からは多量の残留農薬が見つかっている。しかし、水も土も大気も、化学物質や放射能で汚染されている現在、原因を厳密に同定することは難しい。従来の科学的方法・法律では、危険な農薬を直ちに禁止することができないのだろう。疑わしきものをすべて排除することは、ときには危険かもしれない。しかし、生物を殺すためにつくられたものが人間に害をなさないと果たして言える

だろうか？生態系の一部の破壊も、ひいては全体の崩壊を導くのではないか。なぜなら、生命の連なりを断ち切ってしまうからである。

地球上で起きている環境の諸問題の根源は、人間の欲望に発するように思う。たとえば、農薬の大量使用について考えてみても、外見ばかり重視する消費者や労働の削減を目指す生産者の在り方、さらには、危険な輸入食品を含めて、食品を単なる商品にしてしまった現代人の在り方そのものを、今問わねばならないだろう。人間の欲求は文明・文化の発展につながるが、限りない欲望は、現在、人間自らを含めての生命基盤そのものを揺るがしているのだから。しかしながら、人間は目に見えないものや、効果がすぐに現われないものに鈍感になりやすい。農薬の付着も放射能も目には見えないし、その被害も少量では即効性はない。知らないがゆえの過ちを犯さないために、できるだけ様々な体験をし、ひとつの問題を多方面から見つめていきたいと思う。

今回の合宿では、中橋さんをはじめ多くの方に出会い、日常生活では得られない貴重な体験ができた。そして、今まで私に見えていなかったものが、いくつかまた見えてきたようだ。

奇形ザルに出会って

甲南大学　経済学部　一回生　奥山　昌治

淡路島のサルたちは刺すような夏の日差しを避け、木陰でのんびりと、そしておだやかに生活を営んでいた。奇形を持ったサルでさえもそうであった。それは彼らが助けあい、共に生きている群であり、彼ら自身が悲壮感を持ち合わせていなかったからであろう。こうして実際にサルたちに出会ってみると、人間が奇形ザルを見て「かわいそう」と思う感情も、当然奇形ザルが自分自身に同情しているからでも、他のサルが奇形ザルに同情しているからでもなく、人間自身が勝手に作り出したにすぎないのだと改めて思われた。

大学の講義で見た奇形ザルのビデオは「次は人間だ」という危機感と「これらは全て人間が犯したのだ」という罪悪感、そして「何とかしなければ」というあせりを私の中に生じさせた。ビデオの内容が私に衝撃を与え、私がそれに反応したのである。プロジェクターに映された奇形ザルの姿の断片でさえも、衝撃的だったのであるから、私は実際に淡路島モンキーセンターへ行って奇形ザルと出会うこの合宿に対して、参加すると返事したにも関わらず、躊躇していた。

当日、現地へ向かう車の中でも、帰りたいという思いをめぐらせ「実際に奇形ザルたちと出会って、目のあたりにすれば、私は一体どんな衝撃を受け、どんな反応をしてしまうのだろうか」という不安に駆られていた。最初のうちは過剰に構えて、モンキーセンターの餌場

への道の途中でも、二、三匹のサルが現われる度にギクッとし、奇形でないことがわかるとホッとした。

奇形ザルと出会うのに思ったほどの時間はかからなかった。餌場に来ているサルの群の中をいちいち探さなくとも奇形ザルは、否応無しに私の視界に入ってきた。私の心に防衛本能のようなものが働いていたからというだけではないだろうが、私には奇形ザルたちは普通に見えた。否、「普通」というと誤解を招くかもしれない。彼らは自然で当たり前だった。そして奇形でないサルたちも自然で当たり前であり、またそのように奇形ザルに関わり、共に生活していた。

もちろん奇形ザルたちは、奇形というハンディを背負い、なかには歩くことさえままならず、厳しい自然の中で生きていくには相当な努力を要求されるであろう。そして、このようにしたのは残留農薬や添加物などによる食糧汚染、つまり人間が行った環境汚染・破壊が原因であるようだ（私にはそうだとしか思えない）。しかし彼らは当たり前のように食べ、当たり前のように呼吸し、生きていた。両手、両足がほとんどないような重度の子ザルは歩くことができず、自分の身体を横たわらせ、転がって移動していた。彼はそれを悲しむ様子はなく「それが当たり前」とでも言うように、しかし必死に転がっていた。私がそれを見て胸を締めつけられる気持ちになったのは事実ではあるが、同時にそのように感じたことが恥ずかしくてたまらなくなった。純粋なつもりの自分の気持ちは、実は偽善的な要素を持った妙な同情心というものがまじっていて、不自然なことに気づいたのである。つまり彼の当たり前のように転がる動作によって、それが衣をはがされ、白日の下に照らし出されたからであった。

それからの私は自分を優位な立場におく同情心を排除し、当たり前に、自然に、彼らと接しようと必死になった。しかし、彼らを見て何かを感じとれば、特別な感情を入れまいとして不自然になってしまう

メグ

し、かといって無視できるほどに軽く考えられない奇形という事実。自分の欲求水準が高すぎた、あるいは無理しすぎたせいか、十分に「当たり前に」接することは、最後まで成し遂げることができなかった。

考えてみれば私が奇形ザルに出会う前に感じていた不安は、私が受ける衝撃やその反応に対してだけではなく、「当たり前さ」や「自然さ」をもった行動や感情を表せわない自分を発見してしまうことに対してでもあったような気がしてきた。

奇形ザルを生んでしまった現代文明。それは人間の傲慢さによる勘違いが自らの上にまた勘違いの建物を建てていって出来上がってきたように見える。そして、私が失ってしまっている「当たり前さ」「自然さ」もその建物に隠されてしまっているのかもしれない。それを探しあてて、元にもどすことは容易ではないが、手遅れではないと願いたい。今でも「当たり前さ」「自然さ」をもって生きているサルたちから学ぶことは多いようだ。

食料・自然・生命

甲南大学　文学部　三回生　北村　光子

淡路島の暑い日差しの中、木陰で寝そべってグルーミングをしているサルたちは、和やかに時を過ごしていた。遠まきに眺める私たちのことなど気にもとまらないように。サルたちが餌場に降りて来る時の「クー」という甘えたようなやわらかい声は、「キーキー」とヒステリックな鳴き声をすると思い込んでいた私には何だかうれしい驚きだった。親和性の高い群れの中で、重度の四肢奇形をもつサルたちは

グルーミングのようす

何の隔たりもなく伸び伸びと暮らしていた。差別も偏見もないサルの社会に、包みこむようなあたたかさを感じた。この春生まれたばかりの小さなサルが不自由な手足を使って遊んでいる姿があまりにも無邪気で屈託がなく、それだけに様々なことを考えさせられた。

餌付けに使われる小麦・大豆・落花生などの食料は輸入物で、人間が食べるのと同じものである。国産の農産物に比べて、輸入物には何倍何十倍もの残留農薬と添加物が見出されている。これは生産地から消費地へ運ぶための必要悪のためだけでなく、ゆるやかな食品規制によると推測される。ＷＨＯ（世界保健機構）などの国際機関と、消費者団体や民間の研究機関とでは、規制すべき基準の報告に食い違いがある。国によっても個々別々である。ポストハーベストの問題を例にとってみると、農産物の収穫後の農薬散布は農薬の残留率が高く危険性も高いが、世界的にはＷＨＯで認められている。その一方、日本国内では禁止されているが、日本への輸入農産物については規制するものがなく、その大きな網を抜けて入ってくることを是認するという矛盾をかかえている。規制のばらつきは、資本の側にたって、食品の安全性を歪めても流通に乗る商品としての価値をとるか、人間が食べる食品としての価値を重視しているかの違いだろうか。私たちが生活していく上で欠くことのできない食物と、それを支える農業にも関係してくるだけに、長い目で見て、決して譲ることのできないスタンスを確保しなければならないと思う。

その危険性を知りつつも農産物を輸入する理由の一つに、日本の食料自給率の低さがある。ここには経済摩擦の問題が関わっていて、一概にどちらが原因、結果とは言えないが。主食の穀物自給率の３割という数字が、米の自由化を受け入れたときにどこまで維持していけるのか。21世紀には訪れると言われている自然の包容力の限界の60億人を越える人口爆発で世界的な食料危機に達した時、あるいはそれ以前

モンキーセンターのサルたちと

に経済戦争が起こった時、食料を全面的に輸入に頼る国の行き着く先は見えている。ただし、ここで付け加えたいのが、安直に発展途上国の人口抑制を唱える意見への反論である。南の国の貧しい人々にとって、子供は家計を助ける働き手としても、社会保障のない世の中での唯一の頼りとしても、なくてはならない存在である。その上、生まれた子供の二人に一人しか生き残れない社会の中で、多産は当然とも言える。人口抑制以前に構造的な貧困を解決する必要がある。やがて訪れる、私たちの豊かな生活からは予想もつかない時代に備えて、足元からしっかり基礎を築いていく必要がある。そう遠くない未来を見つめた時に、私たちの生活の基盤となる食をまず第一に考えて、農業の重要性を見直さなければならない。それと同時に、食生活の行きすぎを取り戻す必要もある。西洋型の肉食の増加によって、子供にまで成人病をもたらしていることを考えても、米、野菜、魚を主体とした元来の日本の食生活が理想的なものであることがわかる。

農業の基盤となり、生命の源でもある土や水の循環を破壊しながら、目先の豊かさを追い求め続けたあと、私たち人間の存在自体が揺り動かされる時が来るのかもしれない。かつて目的に至るための手段だった科学に偏重し過ぎた現代において、私たちは目的を見失って、科学の方向づけを忘れてしまってはいないだろうか。もう一度土や水を生かして、自然に生かされる生活を取り戻していくことは、私たちと未来を担っていく子供たちにかかっていると思う。土に触れる楽しさや、自分の手で収穫する喜び、自然のなかで生と死の神秘を知ることを、「自然と生命の連なり」を、学校教育や地域社会を通して伝えていきたい。

サルにおける観察の意義

甲南大学　理学部　一回生　島津　一樹

奇形ザルを見た。私はそれ以前から雑誌などを読んで何となく知っていたが、実際に観察したのは、これが初めてだった。この観察をするまで、奇形ザルの不自由な動作を見るのが嫌だった。その姿を見ては非常に憐れに感じ、絶望していた。その私が実際にそのサルを見た時、今までのマイナスのイメージが消えていった。このサルたちもただ少し不自由なだけで普通のサルと同じように生活しているのだ。その時から私は一般のサルを見るのと同じ視点で奇形ザルを見れるようになった。

そう考えているとふと思ったのだが、私はすべての動物に対して色眼鏡で見ていたようだ。山に出かけてはオオムラサキ、ギフチョウなどの美しい蝶を追いかけ、更には蘭をも探し出した。そのような行為

の中で、特別な環境に生きる生物や数少ない生物に対する新しい考えが生まれた。どうして減ったのか、どう人が関与したのか、という知識も深めた。しかし珍しい生物を減少させる行為だといわれると反論のしようがなかった。とにかく変わった生物や派手なものは人々を喜ばせてしまう。その結果として、エビネのように全国に数多く生息していたものが、大変きれいな花のために非常に珍しいものになってしまった。

つまりそれは相対的位置づけで生物をとらえているにすぎず、それは本当の観察と言わないのかも知れない。では本当に上手な観察とはどういうものだろうか。

その観察法とはある一種の生物だけを見るのではなく、その生物をとりまく自然、はたまた人との関連性までも考慮した視野でとらえることではなかろうか。

私たちがこのようにしてサルを身近に観察できるようになったのは、餌付けによるものである。それが意味する最も重要なことは、人とサルとの交流であろう。サルから得られるものは何もないと思うのは人間の傲慢だ。現代文明の中にひたりきっている私たちが、山に生きるサルの知恵を学ぶことは新たな発見、いや、忘れられていた記憶を呼びさます気がする。

これからは自然と人間社会との調和が大きなテーマになるだろう。

科学的思考と環境問題

京都産業大学　二回生　真野　裕澄

山へ登って行く途中、野放しにされている大勢のサル達が、さっそくぞろぞろと出て来ました。まるで出迎えてくれたようでした。私の自宅近くの亀岡や京都の嵐山でも野生のサルを見る機会はあり、初めてサルを身近に見たわけではないのですが、動物を見るといつも心が和みます。この日もいつものように見入っていました。しかし、淡路島で手足に注目してよくよく見ると、二匹三匹と他のサルと違うサルが次々に目にとまりました。あまりに沢山のサルが、「奇形」であるということに愕然とし、このサルたちの中に大きな問題が潜んでいることにあらためて気付かされました。

所長である中橋実さんや、飼育に携わっている人達のお話では、人間が食べているのと同じ林檎などを餌としていて、こういったサルが生まれるとのことでした。どうやら、作物を作る際に使われる農薬が影響しているらしいのです。ここでも、人間がもたらす自然破壊の深刻さがよく分かります。一方、我々人間もこのサル達と同じ物を食べているのですから、いずれ同じ苦しみを味わうことになるのは避けら

れないでしょう。食物の本来の意味を忘れてしまい、営利の追求ばかりを考える人間達の愚かさが、私には滑稽にさえ思えてきます。

また、森林伐採等の環境問題が取り上げられている昨今ですが、科学の力が世間に認められるようになってから、ずっと指摘され続けてきたことのように思えます。しかし、あらゆる点において効率を優先する態度を突きつめ行なってきた人間のおごりの結果、木々を切り倒し、動物達の生活を奪い、共存するべき動植物の生態系を踏みにじってしまったことは、なんとも空しい気がしてなりません。長い目で見ると、自然界ほどうまくバランスのとれた世界はないのに、目先の便利さを追求するあまり、科学の進歩が単に世界を複雑に、かえって非合理的にしたように思えます。

超高層ビル、航空技術、通信システム、医療技術、バイオテクノロジー、人工衛星…どれをとっても、様々な方面から多角的に試行錯誤を繰り返したうえでの行動なのにもかかわらず、多くの問題を生み出しているのは、結局もっと先が読み切れていないということになるのでしょう。しかし、私はこのような先端技術を否定した立場をとっているわけではなく、それだけに科学の限界をまざまざと見せつけられているようではがゆくて仕方ない思いです。

ここで、この問題を科学者の立場で考えてみます。科学や医療の進歩が後退の要素を多分に含んでいるのは、先程から述べてきた通りです。発展の影には、絶えず実験的な要素が必要不可欠で、多くの犠牲の上にあるというのも事実だと思います。とはいえ、多くの恩恵を受けていることも明らかな事実です。「こうだったらいいなぁ」、「こんなことができれば、もっと素晴らしいのに」といった人々の様々な思いを実現してきたのがまさに科学そのものなのです。すなわち、ある意味で科学を否定することは、夢をもつことを否定するのにつながってくるのではないでしょうか。

メグ

楽観的かもしれませんが、これからも、この環境破壊という問題を解決していくのは科学の力なのでしょう。自分でまいた種だから当然だと言われるかもしれませんが、人の望みを叶えるのが科学の力だとすれば、その後の始末も科学なのでしょう。絶えず自らの営利を追求し、全てを合理的に行なおうとする国が先進国といわれている以上まだまだ多くの森林や、動物達が犠牲になるのでしょう。とは言っても、その先進国が、合理化一本槍の態度によりもたらされた矛盾に突き当たった今、この問題を正面からとらえて見直していこうとするのなら、このままの状態が続くとは思えないのですが…。

このように考えてみると、人間はどうも自然界の生態系の一員ではなく、全く別の生物のような気がするのは私だけなのでしょうか。

ＶＴＲ撮影を通じて感じた「環境問題」

甲南大学　理学部　一回生　木戸　英貴

この夏淡路島モンキーセンターを訪ねて、普段それほど人間以外の動物と親しく接することのない僕にとっては、サル達のかわいさ、賢さ、そして野生の力強さというものを感じた。それに、表情といい行動といい、何もかもが新鮮で、すべてが予想以上のもので驚いてばかりであった。

今回の合宿において、僕は記録係としてビデオを持ち、サル達にカメラを向けた。しかし、思うように撮れない。たしかにカメラを持つのが初めてであったことも事実ではあったが、それ以上に思うようにいかなかった。カメラを向ければそっぽを向かれ、近付けば遠ざかれたが、次第にカメラを無視してくれるようになった。こちらがあまりに撮ろう撮ろうとすれば、やはり感じるようで、あくまでも自然にしなければならなかった。

しかし後には、いつもは子ザルを離さない親ザルが、撮ってもいいよと言わんばかりに子ザルから少しだけ離れ、僕がその子ザルを撮っているのを気にしながらも知らん顔をしてくれているような時もあった。

そして、長時間カメラを向けていてしばしば感心したことは、ここに住むサル達の親和性の高さだった。群全体が家族のように見え、ボスも組長というよりお父さんという感じで、それはピラミッドの頂点にボスが位置するのではなく、円の中心にボスが位置するようであった。そのことを一層印象づけたのは奇形ザルの存在であった。奇形ザル達は他のサル達と何ら変わらない生活をしていて、この社会形態は人間社会が見習う必要があると思えた。過保護すぎず、薄情すぎず、そして厳しさの中にも優しさを持つ母親と社会の存在からなる群で

あった。

しかしこのような社会の中にも、生きて行けない奇形ザルは、何頭もいるのである。春から夏にかけてサルは出産を迎える。同センターにおいては、生まれてくるサル達の中に、残念ながらほぼ毎年奇形ザルがいる。そしてこの中の重度の奇形ザルの中には、冬を迎えることは出来ても冬を越せないサルも何頭かいるのである。ほとんど毎年のように奇形ザルが生まれる。さらに、人間の目に入る以前に、死んだ奇形ザルもいるはずである。この現状は異常といえるだろう。しかし逆に見れば、このサル社会においては正常、当たり前と感じられているのではないだろうか。

現代社会において、自分さえ良ければ、幸せであればよいという考え、しかも、物欲、金欲を中心とした幸せが表面化している人間の行動は、間違いなく環境問題へとつながっているであろう。人間が欲望を行動原理とするかぎり、淡路島の奇形ザルの発生率にみられる異常は途絶えないだろう。

人間は様々な環境のもとに育ち生きている。家庭、学校、社会、そして自然など、環境と言っても本当に様々である。このすべての環境のもとで暮らしている人間がいつからか、人間と自然環境とを切り離し、人間のための自然環境という図式に変えてしまった。この図式を含む現代社会の人間の内的環境が、自然環境を含む外的環境へと現れているように思う。今日、自然環境が見直され、エコロジー・ブームが起こっている。“環境問題”これ以上自然を汚さない、汚れた自然を取り戻そうという自然環境への配慮がされ始めた。ここでは「自然と共に」という思いが大きくなってきた。この方向は決して間違っていないし、全世界に広まり深まって欲しい。そして新たに「自然と共に」から、「自然（じねん）のままに」という客観的な自然の見方さえなくなり、自然そのままといった主客合一の自然観を持てたらいい

モンキーセンターの林で

と思う。そのためにも今、現実を正確に捉える必要がある。環境汚染は科学の発展の副産物であるとか、科学の誤った使用方法であるから、科学で元へ戻せるといった科学への絶対的でかつ楽天的な信仰は、まずなくすべきである。本当に科学的に客観的に現実を見たならば、その過ちが分かるはずである。

奇形ザル問題に正に直面し、等身大で捉えている同センターに対し、金儲けのためと非難する人達がいるそうである。また、奇形ザルはかわいそうと思うが、やっぱり他人事とする人がいる。大変残念である。僕自身、今は環境問題に対して運動などはしていないが、ただ等身大で受け取り、等身大で身につけたいと思っている。

今回のビデオを撮影しているとき、無意識に奇形ザルばかりを撮り、正常のサルを見れば残念な気持ちになっていることに気付いた時があった。奇形ザルを特別視している自分に気づき、自己嫌悪になったこともあった。しかし、実際に長時間サル達に囲まれ奇形ザルを見てほのぼのとする時もあり、それに、ビデオを見る人に少しでも奇形ザルを知ってもらうためには、明暗両面を伝えることも必要であると実感した。

お世話になった延原夫妻

ヨーガの思想と実践

ヨーガ禅道友会教師　渡辺　昧比

＜ヨーガの本質＞

「ヨーガとは、心のはたらきを止滅することである」（ヨーガ・スートラ）

ヨーガの根本教典で、紀元前二世紀から紀元後五世紀にかけて書かれたものを、パタンジャリが編纂したと言われているヨーガ・スートラでは、ヨーガの定義をこう説いている。

ヨーガの語源は、紀元前六世紀頃のサンスクリット語yuj（ユジュ）にさかのぼる。ユジュとは、軛（くびき）をつける。つまり、牛や馬を荷車につなぐことをあらわす。

紀元前六世紀から二世紀にかけて成立したとされる、古代インドの神秘思想ウパニシャッドの一つ、カタ・ウパニシャッドには、ヨーガについて述べられている箇所がある。

「アートマン（真我）を車主（馬車の主人）、肉体と車体、覚（人間の最高の知性）を御者、意（心の働きの中で覚より低い）を手綱と心得よ。賢者たちはもろもろの知覚器官を馬と呼び、諸知覚器官に対する諸対象を道路と呼んでいる」

「五つの知覚器官（眼耳鼻舌身）が意とともに静止し、さらに覚も動かなくなった時、人はこれを至上の境地と言う。このように、心の諸器官を固く抑止することを、人びとはヨーガとみなす」

このように、元来、「馬が勝手に外へ走らないように軛をつける」ことを意味したユジュは、次第に、外の対象へ向かう五官を制する三昧をあらわすようになる。

ここで、前述のヨーガの定義にもどろう。

「ヨーガとは、心のはたらきを止滅することである」（ヨーガ・スートラ）

心の働きとして、正しい知識、誤った知識、観念的な知識、睡眠、記憶の五種類をあげ、これらの働きを抑止して、消滅させる心理操作がヨーガであると述べている。と言うのは、感情や意志が意識の上にあらわれるためには、この五つの働きを基盤としなければならないと考えたからである。

では、なぜ、古代の思想家達は、「心の働きを止滅すること」に、数世紀にわたってまで真剣に取り組んだのであろうか？

一般に、私達は、心の働きが激しければ激しいほど、何かと一生懸命にやっていると思いがちである。しかし、よく考えてみると、それは、自分の中の激情（怒り、我欲など）や、自分以外のもの（競争心、嫉妬など）にひきずられた場合が多い。このような状態は、先程の例で言えば、御者はよそを身、手綱さえどこにあるのかわからなく、不安この上ない。

それでは道を誤るということに気付いた思想家達は、心の働きを止滅することが何よりも必要と考え、ヨーガ行法をあみ出した。

その具体的な方法として、ヨーガ・スートラでは、八部門をあげている。禁戒、勧戒、坐法、調気、制感、凝念、静慮、三昧がそれで、中でも坐法は大きな意味を持つ。ヨーガ・スートラによると、「安定した、快適な坐り方」（筆者註、ここでの坐り方は坐法をあらわす）は、「緊張をゆるめ、心を無辺なものへ合一させることによって得られる」が、この場合の『合一』（サマーパティ）は、『定』をあらわす。坐法をマスターすることは、『定』、『三昧』の境地を意味する。このことから坐法は、瞑想の前段階であると同時に、瞑想そのものという意味で動禅とも言われる。この時、ヨーギ派、「寒熱、苦楽、毀誉、褒貶等の対立状況に悩まされることはない」（ヨーガ・スートラ）境地に達することができる。

＜夏合宿でのヨーガ＞

以上のような基本的な理論を中心に説明した後、坐法、調気法、瞑想の実技を行った。

坐法は、前屈、後屈、ねじり、バランスなどのポーズを、シャヴァ・アーサナ（屍の体位）を適当に入れ、各自ができる範囲で行った。調気法は、気を整えるという意味だが、一般には呼吸法と言われる。この日は完全呼吸法を行った。

瞑想は、一輪のバラを、その対象とした。

心理操作としては、目の前のバラをみつめ、意識をバラそのものに集中する。しかし、つい、他のことを思ってしまったら、再び、目と心を目前のバラに戻す。このようなことをくり返していると、自分の中でのバラの存在が次第に変化する。それはまた心の変化でもある。一例として、筆者の例を述べよう。

最初、バラは小さく咲いている。周囲の人々の存在感が強く、いか

坐法　ねじりの体位

にもひっそりと咲いているという感じである。集中が深まると、バラ以外の人、モノは、バラの背景として沈み、バラは色鮮やかに、生き生きと咲き、次第に存在感が強くなる。さらに続けると、周囲の人、モノはすっかり消える。バラは実際には小さいはずなのに、その存在は大きく、迫力をもって＜私＞の方を向く。＜私＞もバラに向かっている。この後、＜私＞がバラに近づくか、あるいはともに近づくかは微妙だが（両者が近づくのが妥当と思われる）、いずれにせよ両者は近づき、一つになり、さらには一つのものがなくなったと言ってもいいし、無限に拡大したと言ってもいい状態になるだろう。

この境地が最終的な状態とする説と、もう一つ奥があるとする説がある。後者は、前者の状態になった時、自動的に『真我』が現れると言う。大乗仏教では、『空』にあたる。

「そう制（筆者註、凝念、静慮、三昧への一連の心理課程）を克服したときに、真智が輝き出る」（ヨーガ・スートラ）

このような境地に達するには、大変な努力と年月が必要だが、そこまでいかなくても、「ヨーガの諸部門を修行してゆくにつれ、次第に心のけがれが消えてゆき、それに応じて英智の光が増」すようになる。（ヨーガ・スートラ）

《淡路島モンキーセンターを訪ねて》

話には聞いていたが、モンキーセンターを訪ねたのは初めてであった。所長の中橋実さんのお話しによると、奇形の原因として農薬、添加物、環境汚染、ストレスなどが考えられるそうである。その中のどれ一つとっても、人間との関わりが深いだけに、奇形ザルの問題は、人間の問題とも言えよう。

ここで、ある種の人々は、反対運動をおこすだろう。「農薬反対！」「添加物の規制をもっときびしく！」など。ある種の人々は、自分達の健康を気づかい、家庭菜園を始めるかもしれない。さらに、ある種

バラを見つめる瞑想

の人々は、川や海を汚す洗剤の使用をやめ、粉石鹸を使ったり、節水をこころがけるだろう。

どれもが、いいことである。生活の中でその人にあったやり方で実践するのはすばらしいが、そのもと、人間の本質を考えることも必要と思う。

現代ほど意識が拡大し、欲望が肥大した時代はない。人間のあり様をはめ込んでいたワクが大幅にゆるみ、なくなり、欲しいものが即、手に入る今日では、外部に対して行為、行動することと同時に、自分の心の奥の欲望に向きあうことも重要ではないだろうか？現代人は、自分で意識する以上に、貪欲で自己中心的な面を持つ。たとえ立派な行為、行動をしても、そのことに安心せず、心の中のエゴを見つめることも必要と思われる。

害がなくても、笑いながら虫を踏み殺す子供、ウソを方便と教える大人、もっともっとと駆り立てる風潮の中で、知足（足るを知る）と言うと表現は固いが、自分をみつめた上での、本当に必要なものだけのスリムな生き方は、贅沢でぶよぶよした社会や、瀕死状態の自然を蘇らせる原動力になるのではないだろうか。

参考文献
佐保田鶴治著『ウパニシャッド』平河出版社
　同 上　『ヨーガ・スートラ』同 上

ヨーガと私

甲南大学　経済学部　四回生　吉川　亜子

『瞑想』という言葉は大変神秘的である。私のような凡人とは無縁のような気もし、幾分気遅れはしたものの、こういう事柄につきものの“空”、“無”、“集中”というような言葉の実体にもおおいに興味があった。講師の渡辺さんの指導の下、蝉の声を遠くに聞き乍ら、今から一体なにが起こるのか、神妙な顔をした参加者の中の一人として参加させて頂いた。

ヨーガの瞑想は、何か対象を定めそれに心を集中させ、心をその対象そのものに変容させてしまう行法ということである。ヨーガを行う為の身体条件も整っていない私が、一体どれほどのものを感じ得るのかと実習自体に懐疑的であったが、とにかくやってみた。

今回の対象物は、何の変哲もないガラスのコップに挿された首を少し垂れたピンクのバラ。三十分位の実習はまず、調気法から入っていく。半跏趺坐に似た形に足を組み背筋を伸ばし丹田に息をおろす。身を落ちつけようと思っても、地面に転がるボールの如くお尻のすわり

が悪く息を整えることさえままならない。大きく姿勢をかえることも憚まれ、全てを時間の経過に委ねるしか方法はなかった。日頃クラブなどで坐りなれていたので足の痛みは私にはさほど苦痛ではなかった。最も意識したのは姿勢を保つという一見簡単そうな作業である。姿勢を保つために、私は身体のすみずみまで緊張させなくてはならなかった。

スポーツでもそうであるが、ある程度身体がそれを実践するためには、それに適したフォームという身体条件を得なくてはならない。私は、大学で弓道部に籍をおき、弓をひくということを通じて、今回と同じようなことを味わっていた。決して上手な弓引きではなかった私は、師範や先輩にいわれることが頭でわかっても、身体がそうならないという経験をよくした。その時にも感じたことであるが、自分の身体であるのに、自分で制御できないというのは情けない。左右均等に身体を引き分けているつもりでも実際には片方によっていたりする。それほどに自分自身の身体に対する感覚や意識というものは、自分勝手というか、いい加減なものである。自分の身体のバランスを保つという行為のために、私は自分の身体のすみずみまで神経を集中させ、緊張させておく必要があり、又それは客観的でしかも公平な意識下になくてはならなかった。始めのうちは、何が何だか分からず、ただただ緊張して練習を行うだけであった。習うより慣れろというが、やがて、私も少しではあるが自分の動作を割りと無理なく客観視できるようになった。ただ今回の瞑想というのは私にとって初めてであったので、私は体に緊張を強いられなくてはならなかったのである。

しかし、弓を通して得られるものと似かよった行為のため、思っていたよりスムーズにヨーガの身体条件に近づくというか、身体のバランスをとることができたようである。それと同時に自分の身体内の感覚や意識の中心が鮮明に見えだすなど、身体感覚がさえわたってくる気がした。呼吸も当然自然のものであるが意識において客観的に全て把握されているという感じを覚えた。

坐禅では「非思量」「無心」ということを言われ、当時の私にとってそれは、『何も感じてはいけない』ということのように思えた。しかし今回、バラという対象物を与えられて、それに向けて心を集中させるというやり方は、「禁止」されていない点で余計な思いが介入しにくかった。私たちは全員バラに向かって輪になって坐っていたが、その形は対象物を懐に迎え入れるように解放的に思われた。私は身体のあちこちに沢山の糸がくくりつけられて、天地左右、全ての方向に引っぱられることにより、空中に浮くとも浮かぬともいわぬ安定した居心地の中、ようやく、「バラ」に心を向けることができた。弓では対象ともなる的は、「自分を写す鏡なのだ」と練習中よく言われた。それは又、的に心を通わすことで中りとなるというような言い方もされたが、不思議なことに「バラ」からは、つぼみから外に向けて開こ

うとする生気が溢れ「開きたい！咲きたい！」といわんばかりに前後左右に激しく揺れ、葉さえも伸びようとするようになっていた。コップの水はこぼれんばかりで、花からはスポットライトの光線のような光が見えた。私は、初めての、それもごく短い実習で、対象との統一などということができたとは到底思えないし、私に見えた現象が特別だったとも思っていない。実習後に感想を交しあった時、私と同じような「バラ」を見た人は沢山いた。皆不思議がっていたが、幾人もがそう見えたという事は、ヨーガの瞑想法のプロセスの何かが私たちに強く働いたのではないかと考える。私はその対象を自分勝手な判断ではなく、対象そのものをあるがまま見る、または認めるという、丁度、身体感覚が冴えた時に、あるいはそのプロセスで覚える身体感覚の客観的に識るという現象が対象のバラに投影したように感じている。

この短い実習で、片よりなく公平に意識することの難しさを再認識し、自らをニュートラルな状態におくことによって得る清々しさや充実感をほんの少し味わえた。多くの参加者の実習後の幾分興奮した様子と共に、この濃密な時間は忘れがたいものとして私の心に焼き付いている。

揺れたバラの花

甲南大学　理学部　二回生　前田　拓志

今回は、淡路島でゼミ合宿を行った。目的は二つ。奇形ザルについての調査と、ヨーガの練習とメディテーション（瞑想）の実習であった。

まずメディテーションの実習についてであるが、今回ヨーガを用いたのは、指導して下さる方がゼミの聴講生であったことによる。

ヨーガを始める前は、テレビや雑誌でみかけるようなとてもできそうにない姿勢をとらないといけないのかと不安であったが、始めてみるとそのようなポーズはとらないので安心した。しかし、痛い姿勢のまま何秒間か維持するのには閉口した。こうして体を柔らかくした後、メディテーションに入る。バラの花の一輪挿しを中心に、みんなで輪になって、見る。ひたすら見る。すると何か変化が生じてくるらしい。僕の場合は、バラの花が揺れたように見えた。

輪になっている我々がバラに対して同じことを思い、念じるとその通りになるらしい。例えば、バラの入った花瓶ごと宙に浮かべ、と念じれば宙に浮くそうだが、本当のところよくわからない。バラが揺れてみえたのも、目が疲れたためにぼやけたのを頭の中で「揺れた」と認識したのかもしれない。

他に類似のものに、気功がある。密教の阿字観はインド伝来のもの

だからヨーガに似ているのは当然であるが、それと同じように、気功とヨーガは実質的に同じような気がする。呼吸が基本（しかも共に腹式呼吸！）であるし、瞑想時の姿勢もよく似ている。気功で言う丹田（へその下）と同じ位置にチャクラがある。ヨーガも気功も、数千年の歴史を経てきたので違いが生じたのであって、時代をさかのぼれば同じ起源にいきつくような気がする。

その後、奇形ザルの調査のためにモンキーセンターを訪れ、中橋所長にお会いして話を聞いた。軽度の障害の場合には群れの中で生きていけるが、重度の障害になると無理らしい。なかでもコータの障害は重かった。そのため、所長さん一家が自分の子どものように育てられたようである。

このような奇形の生じる原因として有力なのが、エサに使う輸入飼料中の残留農薬によるものと考えられる。同じ飼料、あるいはその飼料を食べた家畜を人間も食べているのだが‥‥。

サル山を降りる際に一匹のサルと目が合った。そのとき一定の距離をおきながらも、お互い眺めあった瞬間を思い出す。

太陽礼拝のヨーガ

6．看護とケア

看護に対する私の考え方

甲南病院看護専門学校教諭　寺本　佳利子

看護学生として働いていた頃から、「患者を通して看護を教えてもらい、しかも給料まで貰うなんて申し訳ない。」という思いがあった。学生時代より、「患者あるところに、必ず看護は存在する。」というのが私の信念である。職場を、個人病院から市民病院、財団法人病院へと移っていくうちに、「施設・設備の大小に拘わらず、患者は皆、同じレベルの看護を必要としているし、又、同じレベルの看護がなされなければならない。」と、確信を持つようになった。

今まで多くの患者と接してきた。家庭の悩みを抱えて入院しているため落ちついて療養できない人、日増しに元気になって退院していく人、「病院では三食昼寝つきだから家に帰りたくない。」と退院をしぶる人、家に帰りたいのに病状が悪くて帰れない人、いろんな思いを持った人が集まっており、病院の中はまるで人生の縮図のようだ。様様な人々から看護を学んだ。中でも死にゆく人々から学んだことが深く印象に残っている。

ある癌末期の患者が、周期的に襲ってくる痛みの中で喘ぎながら、一生懸命病魔と闘っていた。やがて意識も低下し、臨終を間近に控えた夜間のことである。夜の静けさの中では一段と不安と苦痛が増し、眠れないのだろう。うつろな表情をしているが、まんじりとも出来ずにひたすら夜が明けるのを待っている。そばに寝ている家人の姿に時折目をやる動作がみられ、つき添ってくれている夫人への思いだろうか、「ついていてくれてありがとう。」「疲れているだろう。」「申し訳ないな。」等々、澄みきった瞳の中にそんな思いを見た。私の身体で苦痛を分かち合うことができたらどんなにいいだろうか‥‥。涙がこみあげて胸が傷む。患者にかける言葉もみつからず、その弱々しい手をしっかりと握ると、声も出せない状態なのにぐっと目を見開き、ぎゅっと力を入れて握り返してくれた。その時の患者の思いが何であったのか知る由もないが、「巡視にきてくれたんだね、ありがとう、苦しいけれど生命の限り精一杯生きるよ。」というように私には感じられた。

翌日、潮が引くように患者は亡くなった。何も援助は出来なかったけれど、気持ちの交流があったことを素晴らしく思う。死にゆく人々の中には、じっと静かに生命の終りを迎える人、怒りをぶつける人、ぐちをこぼす人などがいる。看護婦に向かって訴えてくる人はまだい

い。幾分気持ちが楽になる。だが、何も手をわずらわさずじっと一人で耐えている人には見守ることしかできず、ただただ無力感を感じる。

いずれの場合にも私たち看護婦は、お金では買えない生命と引き換えの貴重な体験をさせてもらっている。本当にありがたいことである。死にゆく人々の看護を通して、それぞれの生きざまをみることにより、自分自身も人間として成長している。死をもって教えてくれた人に、看護は出来ない。しかし、これから関わっていく患者によい看護を行っていくことが、生命と引き換えに私を育ててくれた人へのお礼になると考える。

看護とは、人と人との関わりによって育まれていくものである。患者との貴重な体験を無駄にすることなく、心の看護をめざし、日々自己研鑽に努めていきたい。

看護について考えること

甲南病院看護専門学校教諭　松本　一美

看護婦はどのような仕事をしているのか。一般に、医師の診察の介助を行ったり、包帯を巻いたり、注射をしたりというようなことを思い浮かべる人が多い。しかし、そのような業務は看護のごく一部でしかない。看護婦の仕事は、診察の介助を含めて健康な人が健康であるように、病気になった人が健康を取り戻せるようにすることである。そしてそのために、その人の日常生活を整えていくことであるとも言える。

私は看護婦になって10年になる。看護婦や看護教員をしながら、年年「とんでもない仕事を選んでしまったなぁ。」という思いがつのる。看護婦が嫌になったのではない。“難しい仕事”だからである。何が難しいのか。医学的な知識が必要であるということもある。しかし、そのようなことよりも、“看護の対象が人間である”ことが難しいのである。

人間は一人一人考えていることが違う。似たようなことを考えていてもやはりどこか違う。生きてきた過程、環境が違うから当然である。また、同じ人でも常に同じ看護というわけにはいかない。その日の体調によって求めることが違うからだ。だから、各個人にあった看護（その人の日常生活を整える）を考えることは、それぞれ違う看護を考えることになる。少しでも患者の気持ちに近づいた看護を行おうと努力はする。しかし、私達は時として錯覚を起こしてしまう。「患者はこのように考えている」と思いこんでしまうのだ。所詮、私達が考えることは、私達が考えたことであって、患者の考えではない。このような錯覚を起こすと、患者の気持ちをつかめなくなる。だから、日

日の看護を通して、患者が望んでいることは何かを常に考え、柔軟に対応する能力が必要になる。

また、看護婦の関わり方次第で、患者の人生を変えてしまうことにもなる。極端な例ではあるが、人工呼吸器をつけている患者がいる。本来、患者自身が無意識に行っている呼吸を、機械が代行しているのだ。その機械を管理しているのは、看護婦である。看護婦が呼吸管理をしっかり行っていなければ患者は命をおとしてしまうのだ。看護婦は、その患者の命を預かっているといってもよい。次のような、脳梗塞患者（60才、男性）の事例もある。

この患者は兄弟三人で生活していた。後遺症の半身麻痺はあったが、患者が家事一切をまかなっていた。しかし、肺炎にかかったうえに、男所帯で充分な食事ができず、脱水症状となり入院した。この患者は症状がよくなるにつれ、「家に帰りたい」と言っていた。しかし、発病の前のように動けないため退院してもまた同じように食べられなくなり、さらに病状が悪化し再入院となることが予想された。これでは、家庭に帰っても良い結果にはならない。そこで、兄弟と相談の結果、施設へ転院することになった。

この患者は、命が縮んでも長年生活した家に帰って生活したかったのかもしれない。施設に入ると、規則を強制され、窮屈な余生を送ることになるかもしれない。しかし、そのようなことは結果論である。患者の気持ちを大切にしたいが、家庭の事情で患者の思い通りにならないことの方が多い。このような時も、我々の関わり方、考え方次第で患者の余生が決まってしまうのである。

看護の対象は人間であると前述した。中でも我々が関わることが多いのは、病気を持ったいわゆる“患者”である。そして、患者の家族も含めた援助が必要となる。患者の病気によって家族も“病気”になってしまうのである。このようなことを見ても、やはり看護の場は施設内にとどめることなく、地域に目を向けて広げていかなくてはならない。前述のような事例も、訪問看護の力で療養することができる。また、家族の“病気”も軽減できるからである。そして、そのことが患者の回復につながるのである。

もう一つ寝たきりの患者の事例を挙げる。寝たきりになってしまった女性が「元気になっても帰るところがない…。」と言う。理由を聞くと、同居の嫁から「おばあちゃん、帰ってきても皆に迷惑かけるだけだし、居るところがないよ。」と面と向かって言われたと嘆いていた。「何てひどいことを…。」と思った。しかし、反面そのようなことを言わざるを得なくなってしまっている嫁もまた病気ではないか。嫁にとって、姑の入院は非常に負担になっている。その上、退院すれば看護の重荷を一手に引き受けなければならない。また、姑の入院中その家庭では、姑のいない生活パターンができているから、姑の退院と同時に家庭の生活も変わる。これらのことによって、嫁の負担はさら

に重くなる。心の余裕がなくなってしまっても無理はない。このような状況で患者が家に帰っても、患者も家族も不幸である。

患者が安心して療養生活を送り家庭に帰るには、家族が患者を引き受けて、家庭で前向きに介護できるようにする必要がある。そのためには、病院という施設にとどまることなく、継続した患者・家族への援助を行っていかなくてはならない。このようなことから、今後訪問看護がさらに重要になってくる。

以上、看護婦の仕事について考えていることを述べた。看護婦の仕事は大変で難しいとつくづく思う。しかし、難しいことや嫌なことばかりではない。看護を通して人の生死、人生などについて考える機会を沢山与えられる。そして、私自身も成長させられている。だからこそ日々の看護を大切にしたいと思う。看護とは難しいが素晴らしい仕事である。

松本先生、寺本先生（甲南病院）と一緒に

7．夏合宿運営後記

甲南大学　文学部　三回生　井垣　博美

1990年８月６日、谷口ゼミとしては二度目の、そして私たちゼミ生にとっては初めての淡路島モンキーセンター訪問が実現した。前回の訪問から七年が経っているにもかかわらず、今年も奇形をもつサルが生まれているという話を聞き、深重な面持ちで私たちは夏合宿を迎えた。

初日の朝、大学とJR鷹取駅に分かれて集合。しかし、大学にM.Kさんが来ない。いくら待てども連絡も取れず、しびれを切らして出発したのは集合時間から１時間も過ぎた頃だった。そして５台の車を連ねて須磨港へ向かう途中にも後ろ２台が行方不明となり、鷹取組と合流して無事フェリーに乗れたときには予定から１時間半遅れていた。船中で昼食を取り、大磯港に着くと、何故かM.Kさんが先にバイクで待っていた。地元のA.Tさんとも無事合流し、千福寺へと急いだ。

千福寺は洲本市内の少し入りくんだ所にあり、数台の車が迷うという小さなトラブルがあった。部屋に荷物を置き、本堂に集合して、すぐにヨーガを始めた。渡辺さんにヨーガについて説明をしていただき、その後実習に入ったが、サヴァーサナで寝てしまう人がいたり、バラを見つめる瞑想でK.Aさんがキント雲のようなものを見たりとなかなか楽しかった。

夜には山階御住職に「生きがいについて」と題して、仏教の視点から見た現代の様々な問題について講演して頂いた。仏教の自然観には興味深いものがあり、また、その謙虚な生きる姿勢に共感を覚えた。次に、甲南病院看護学校の寺本先生と松本先生に「看護とケア」について話して頂いたが、そこでは生命の重さだけでなく、倫理や理屈だけではどうにもならない現実の人間関係の難しさと、だからこそ大切にしたい心の暖かみ、人を想う気持ちを改めて感じさせられた。またこの時、A.Tさんのご家族の方が西瓜を差し入れてくださった。しかし、西瓜のおいしさもさることながら、お兄さんによく似た？妹さんのかわいい笑顔が印象に残っている。

翌朝は５時半起きで太陽礼拝のヨーガをして心と体を清々しく目覚めさせた後、いよいよモンキーセンターへ。しかし、車で向かう途中、一山越したところで最後尾を走っていた先生の車が見えなくなった。迷われたのかと思いきや、遥か後方に黒煙を吐きつつ走る車が…。走行距離は既に16万km、最後まで保つのだろうか、一抹の不安が過る。

モンキーセンターに着いてしばらく歩くと、道の真ん中で数頭のサルが寝そべりながらグルーミングをしていた。そのゆったりした光景に思わず頬を緩ませながら、もう少し歩いていくと、そこには資料館があり、中橋　実所長が暖かく迎えて下さった。そこで私たちは中橋所長から、奇形の原因追求に行政があまり動こうとしないこと、原因

が農薬にあるらしいこと、サルたちの食べている餌が私たちの食べているものと同じもので、その小麦、大豆、りんご等に多種、多量の農薬が使われていることなど伺った。資料館の中も案内して頂いたが、この時、農薬による汚染を訴えることで地元の人々との間に対立が生じていることを聞いた。中橋所長の口調には、様々な障害、人々の利害関係、そして訴え続けているにもかかわらず、毎年奇形の生まれる現状に対する焦りともどかしさのようなものが感じられた。午後からは餌場のほうでサルを見たり、撮影したりしながら話を伺った。真剣に話を聞いていたその時、「ボタ、ボタ！」という音と共にI.Hさんの肩に生温かいものが…！サルのおしっこだった。「すぐ乾くから大丈夫。」と言って笑った顔は引きつっていた。それから皆が頭上に注意するようになったのは言うまでもない。

夕方、慰霊塔にコータをお参りし、中橋所長にお礼を述べて別れを告げ、一旦千福寺へ戻った。この夜、冷房が全開だったためか、何度もヒューズがとび、部屋の中は暗闇に。時は夜、部屋は真っ暗、外にはお墓、とくれば怪談に花が咲く･･･。

次の朝は6時に起きて、朝のおつとめを済ませ、あくびをかみ殺しながら千福寺を後にした。そして再びモンキーセンターへ。この日は昼間のサルがいないときに卒業論文の中間発表を行い、残りの時間はすべてサルの観察と撮影に費やした。合宿の目的上、私たちの目はついサルたちの手足の奇形を探してはいたが、それでも次第に、障害を持ったサルも他のサルたちと何ら変わることなく生活していることに気付いていった。私たちが当初考えていたような暗さは微塵も感じられなかった。むしろ、ゆったりとした時間を生きるサルたちを見ていると、温かい想いを感じるとともに、人間社会への反省の念が感じられた。

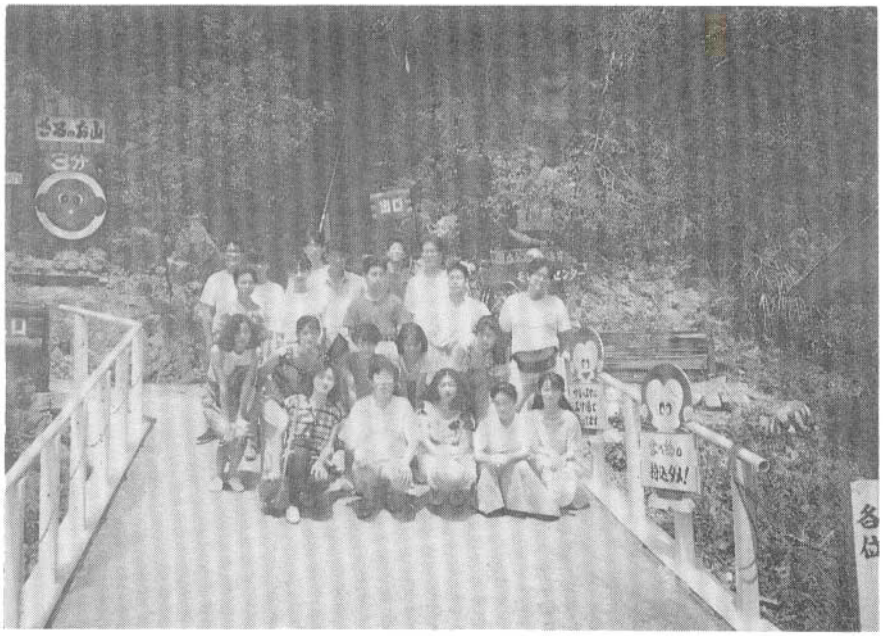
夕食はモンキーセンターでバーベキューを御馳走になり、延原御夫妻とサルのことについていろいろと語り合った。しかし、次第に話し込む御夫婦と先生を待ちきれず、ゼミ生たちは花火に盛り上がり、コンパの頃にはすっかりでき上がってしまっていた。

最終日は朝7時から、二日酔いながらも撮影班は延原氏に追随して、撮影した。サルが降りてきてからは、奥さんがエサ場で餌の状況などについて説明して下さったのだが、その時、谷口先生の手をグルーミングするサルが････！この決定的瞬間を、ちょうどビデオカメラを交換していて撮ることができなかったA.Mさんの表情は、この時を境にすっぽりと暗翳に覆われてしまうことになる。

撮影は昼過ぎに終わり、午後からは海水浴場に行った。数名は二日酔に沈没していたものの、M.Aさん、K.Yさんの両名は素晴らしい水着姿をご披露してくれ、K.Yさんはビデオの撮影に熱中、M.Mさん、M.Tさんたちは波間の向こうへ消えて行った。それからみんなでビーチボールをしてわずかなレクリエーションの時間を大いに楽しんだ。ただ

一名、K.Mさんだけは例外で、K.Kさんの車のキーを落としたと思い込んで、みんなが遊んでいる間、砂浜を探し歩いていた。そして、キーがK.Kさん本人のポケットにあったと知った瞬間、思わず涙をこぼしたのだった。帰り際に集合したとき、本人には内緒にしておいて、A.Tさんを取り囲んでいきなりハッピー・バースディを歌った。この日23才の誕生日を迎えたA.Tさんは、M.Yさんと二人で、帰りのフェリーの中で味付け海苔を眉に付けて“郷ひろみ”をやっていた。

数々のアクシデントを乗り越え、日の落ちるころ、鷹取駅で閉会式を無事終了した。少し陽に焼けた顔は皆それぞれに何かを得て満足気だった。この合宿中、車を提供し運転して下さった谷口先生、A.Mさん、A.Tさん、K.Kさん、M.Yさん、M.Tさん、そして重い機材をもって走り回って撮影し、この合宿の後もVTRの編集をして素晴らしい記録を残して下さったA.Mさん、K.Kさん、K.H君、カメラマンのM.Kさん、M.T君、M.H君、S.K君、本当にお疲れ様でした。そして、暖かくもてなして下さった御住職をはじめ千福寺の方々、体調が悪くお疲れのところ、サルたちのこと、環境汚染について詳しくご説明下さった中橋所長、夜遅くまでお話し下さり、朝早くから撮影にご協力下さった延原御夫妻、本当にありがとうございました。最後に、私たちにこのような勉強の場を与え、生きていくなかでの“大切なこと”を教えて下さった谷口先生に感謝を捧げたいと思います。



淡路島モンキーセンターにて

III

学園生活の一風景

1．一般教養「哲学」の講義の一コマ
「青い目　茶色い目」（ＶＴＲ）の感想

経済学部　一回生　平河　有美子

キング牧師暗殺の白人による黒人を人とは思わないようなリポートに対する反論として、アイオワ州の小学校で人種差別についての実験が行われた。それは目の色、エリの色で人を区別し、「青い目の人は優秀で、茶色い目の人は劣っている。」と価値づけを行うことで差別する実験だった。

“茶色い目の劣った”とされた方は無気力となり、涙ぐみ、にくしみ、屈辱感を持つ。暴力をふるうが、何の役にもたたないと気付く。

“青い目の優れた”とされた方は、優越感にひたり、抑制が利かなくなって意地悪となる。悪意にみちた差別、不愉快な仕打ちを行う。たった15分でクラスは半分にわかれ、それぞれが別人となってしまったのだ。

次の日の実験では逆の価値づけがおこなわれる。昨日、優位にあった青い目の子供たちは、劣ったものとされ、茶色い目の子供たちは優位とされる。こうして両方の立場を体験した生徒らは“差別”を身をもって知り目の色や肌の色で人を判断できないと悟る。そして差別の原因となったエリを捨てたがり、エリに噛みつき引きちぎる。また彼らは、“優れた”という自意識により自己の能力を高めたように「人種差別」について大切なことを学んだという自信でまた能力を高めた。

この実験は、社会の縮図である。エリは取りはずしが可能だが、黒人は肌の色を捨てられない。だから子供たちが気付いた“大切なこと”をもっと多くの人々に知ってもらいたい。

先生が牧師暗殺事件の白人レポーターに対して反感をもったように、人々は差別について敏感になるべきだ。そして差別を無くしていこうと努力していかなければいけない。「人として」同じ人間なのだから。

私は以前“いじめ”られたことがある。そのときの気持ちは忘れられないし、忘れたくない。二度と経験したくないから。人を差別するのも差別されるのもいやだから。差別に鈍感になってはいけない。自分には関係がないなどと思わず、積極的にとりくんでいかなければいけないと思う。たった一人の理解者がいるだけで、差別されている人々の心の中には絶望感がとりのぞかれ希望が生まれてくるのだから。

理学部　一回生　山中　かおり

エリオット先生は、今、世の中で見られる差別について、この差別がどんなに怖いものか、どんなに重要な問題であるのかということを認識させるために、しかもまだ罪を犯す前の子供のために、体で心で

実際に差別にあうという実験の形でそれを教えた。心とは本当に、敏感で微妙なものと思った。というのは、まずテストの成績。差別をうけた者はひどく、あきらめ型になり、やる気もなくなり、成績は最低となり、他方、優れた者だと言われた子供たちはその優越感が能力を高め、自信に満ち成績は最高となったことだ。心のもち方や状況一つで心の状況一つで、大切なものが失われ、ついには生きる気力もうすれてしまうことさえあり得るだろう。

差別は人間を、マイナスにする毒をもつ。この実験を受けた人々は本当によい経験をしたと思う。人にされたくない事はしてはいけないとよく聞いたが、実際、体験させてみるというこのアメリカ的方法は、多少危険な気はするが、子供だからこそ、しっかりと受けとめて、先をまっすぐに進める道へとつながるものだと思う。こういう体験は今の豊かな日本人にとっても、必要なことだと感じられた。

経済学部　一回生　柳田　なつよ

「どうして差別したの？」という先生の質問に、生徒達の答えは、「青い目ではなく、茶色い目だから。」という、他に何の理由もないものでした。素朴な子供達の答えだけに、まるで大人の代弁者のようで、差別の実態を、まざまざと見せつけられた感じでした。

今の今まで友達だった子供が、たった15分で差別意識をもつようになり、ある子は、殴り合いのけんかにまでなりました。しかし、殴ってもすっきりすることはなく、ますます何か分からない憤りがふくらむばかりでした。茶色い目の子が黒い襟をつけてと言われたときの表情は、「なんで‥。どうして‥。」と今にも泣きそうで、それだけに取りはずしたときの笑顔が印象的でした。まるで、今までたまっていた怒りを全て投げ捨てるかのように黒い襟をちぎり捨てまた、もとのクラスメイトとなりました。

先生の一言で、別人のようにかわってしまった子供達。そんな子供達にうえつけられた「黒人に対する差別意識」は、生まれながらにしてもっていたわけではなくて、側にいた親や社会の風潮によるもので、それがどういうことか理由も分からないまま、ただそうすることがあたりまえのように思わせてしまっているのです。そんな社会の中で、差別される苦しみや屈辱を、実際に体験することで学ばせようとした、エリオット先生の試みは、とても勇気のいるものだったと思います。一度根づいてしまった意識は、なかなか取り払うことは難しく、ましてや、社会全体を敵にまわすようなことは避けたいというのが本音だと思います。心では、いけないと思っていても、「いい子ブリッコして」と言われたり、はねかえりを受けることが怖くて行動には、できないでいます。だけど、この子供達は、身をもって差別される、やり

きれない気持ちを知ることができ、今、人の痛みの分かる大人となっています。

肌の色や、生まれた土地によって精神的、肉体的苦痛を与えられる。自分がなりたくてなったわけでなく、ただ生まれたらそうだっただけなのにとても悲しいことです。

もし私が親となったときには、そういう意識をもっている人達の考えを変えることができるほどのバイタリティーはもち備えていないけれど、自分の子供には間違った意識を知らず知らずのうちにうえつけることのないよう、親として責任ある言動・行動をとりたいと思います。

理学部　一回生　松下　准城

ビデオを見て一番驚かされたのはあのような授業を実行したことだ。何でも素直に取り入れてしまう小学生なので、失敗すれば平和だったクラスにいじめや差別を招くことになり、差別された子供には、教師によって意識的に差別されたという一生消える事のない傷を負わせてしまうからである。しかし結果はアメリカという文化背景と子供の素直さゆえに「茶色い目の子はダメ」、「青い目の子はよい」という仮定の世界に本気で入り込み、自分は何も悪いことをしていないのに生まれてきた時にたまたまそうであった身体の特徴によって差別されるつらさ、くやしさを身をもって体験し、「差別はよくない」ということを、彼らは実感した。

世界中のどこの人間をとっても「差別は良い事だ」と言う者はいないと思う。それなのに差別が実在しているのは「差別はよくない」と分かっていながら、心のどこかには「差別なんてそれほど重要な問題ではない」「自分には関係ない」という消極的な考えがあるからだろう。そしてそのような人間が親になったら、きっと子供に「差別はいけない事だよ」と教えておきながら、「あの子は黒人だから一緒に遊んじゃダメよ」などと軽く言ってしまうのだろう。

差別をなくすためにはあの授業を受けて差別を体験するのが一番よいだろうが、それは少なくとも現代の日本では不可能と思われるので、一人一人が差別をもっと身近な問題として考え自分の「差別されている人を見る目」を変えなければならないと思う。そして差別されてきた人が差別によってすばらしい能力を押さえ込まれてきた社会を一日も早く打破し、のびのびと活躍出来る世の中をつくらなければならないと思う。

勝ち目があれば加勢し、負けそうならば遠目で見るという利己主義的な考え方を捨て、一人一人が正しいと思うことを主張していかなければ差別はなくならないと思う。

理学部　一回生　野崎　美佳

人にほめられると、それが自信となり自分が持ち合わせているよりも、もっと大きな力を発揮できる。反対に駄目だと言われると、本来の力を出すことができない。心の持ち方次第で生き方は変えられる。私たちのまわりにはいろいろな社会があり、私たちひとりひとりはそれぞれ違う様々な社会の一員である。同じ人間でも、その交わる社会集団が変われば、その人に対しての考えられ方・見られ方も全く変わる。私もそれを実際に味わったことがある。両方の立場を経験すれば今まで見えなかったものが見えてくる。

差別とはどんなことか？自分より劣った人間の集団を作りあげ、何が特別にできるというわけでもないのに自分が優れた人間であるように考える。そして安心感を得る。

人の生き方として、二種類が考えられると思う。一つは上を見て生きる生き方、もう一つは下を見て生きる生き方。しかし、最近はそのどちらでもない、何も見ずに生きるという生き方もある。無関心が氾濫している世の中だから。

私たちの生き方、限られた時間をどのように過ごすか。考えだすと止まらない問題である。世の中は矛盾していることが多すぎる。しかしその矛盾を突き抜けるためにも、皆が平等であるという信念をもちつつ上を見て生きる生き方が大切ではないだろうか。

2．学園祭模擬店運営後記

天野　雅夫

焼イモを作るときのコツは、ゆっくり、あわてず、あせらないことである。釜は陶器のものか、バーベキュー用の厚い鉄板のものがよい。木炭は、朝から徐々に炎をイコらせ、真っ赤になるまで団扇であおぎ、温度が十分高くなったところで、サッと水洗いをしたサツマイモを釜の中の網の上にすばやく置き蓋をする。一旦蓋をした後は、数十分間、甘い匂いがしてくるまで、蓋を開けずに団扇で小窓からあおぎ続けなければならない。これは木炭の水蒸気を逃さないためである。あおぎ疲れ、それでもなお、つりそうになる手を我慢してあおぎ続けると、やがて釜の中からなんとも言えない良い匂いが吹き出してくる。

ここで初めて蓋を開け、中のイモがどれくらい焼けているかを確認する。軍手でイモを直接さわり柔らかさを確かめるのであるが、そのときイモは、最初の硬さからは想像がつかないぐらい柔らかくなっている。これで、あと少し窯の中で温めるとふっくら焼イモのできあがりである。

ここまで手間をかけた焼イモでも、不思議なことにイモによって味が全くかわってくる。おいしく、まったりとできあがった焼イモを食べていると、そのイモがいかに豊かな土地で育ったかがわかるような気がしてくる。

おいしくできた焼イモは、私たちが客を集めなくても、イモが集める。ホカホカ湯気が通りの人々の食欲を誘う。店の前は黒山の人だかり。とまではいかないが、女の子に引っ張られて一緒に食べる男の子、ワイワイ言いながら群がる女の子の集団、わけもわからず迷い混んだ人など客層は様々。水色の紙に身を包んだイモたちは学園中に広がり、皆様にも喜ばれて、食べられたことでしょう。

ところが、終わってみれば儲けはトントン。「なんでやねん」と悔しがる私たちに、谷口先生の「人生はそんなもんや」。なぜだか納得してしまう私たち。焼イモ屋さんの気持ちが分かった三日間であった。

学園祭　われらの店

3．卒業旅行「淡路島」私見

甲南大学　経済学部　四回生　小花　直樹

本稿が掲載される第八巻の報告書は、サブタイトルに淡路島特集と銘記されるかもしれません。というのは第21回ゼミ合宿に続き、約七カ月後にも我々は「卒業旅行」との大義名分を立て再度淡路島を訪れることになったからです。数々のゼミ活動において唯一勉強抜きのイベントとされる卒業旅行を綴った本稿が、堅い（？）本報告書の中での一服の清涼剤とでもなりうれば存外な幸せと言うべきでしょうか。

さて前置きが少々長くなりましたが、三月八日（金）集合時間前にそろった総勢13名は、薄曇りの空の下、進路を南西にとり淡路島へ向かうことになります。いざ出発！が、その直後に自動車事故の現場を目撃！今回の旅行の不吉な徴候では……と我々の士気は幾分下がりましたが、それでもフェリーに乗り込む時には、もう心が宴会に飛び立っていた人も見うけられました。フェリーでは質素な、しかし値は少々張った食事を取り、「さあ、これからモンキーセンターへ行こうか」との冗談まじりの掛け声で淡路島に上陸したのは午後一時でした。

ここで何とか持ち耐えていた空もついに雨、最初の目的地である三原町のファームパークは屋外施設であるため、車中では幹事の日頃の不行跡が指摘されましたが、幸運にもパーク内見学時には雨が止み、花を楽しむ者、動物と親しむ者、それぞれが満喫した時間を過ごしました。動物を抱くゼミ生の姿は、これまた実に様になっており、この暖かい雰囲気が谷口ゼミの良さだとわかりました。そんなところに魅かれ続けていた私は、もう一カ月もせずに卒業を迎える実情に何とも寂しいものを感じました。

“どの部屋からも大鳴門橋が眺望できる”をうたい文句にした旅館うめ丸には五時にチェックインし、一風呂浴びた後、広間に集まりました。なるほどこれが海の幸かと実感したゼミ生も多いのではないかと思われた活造りは、我々の舌の上で静かに蕩けてゆくはずのものでしたが、方々で次々と顔のブラックホールにほうり込まれる姿が目につきました。魚の身にお箸が触れるとバタバタと動く光景にかわいく驚く女性の姿（色気？）も、やはり食欲には敵わなかったようです。一匹の魚が造りに、アラ煮に、お吸物に、そして最後には（詳細には記せませんが知る人ぞ知る）お酒のイッキの隠し味になり、これぞ素材を生かした料理だと感服致しました。この宴会の勢いは部屋に戻っても続き、ライトアップされた大鳴門橋に心奪われたゼミ生がほとんどいなかったことは残念なことです。

お酒とともに夜を徹して激論を交わした翌朝は、さすがにねぼけまなこで挨拶をすることになりました。今回の旅行は移動に車を使っていたこともあり、皆の苦労と安全を考慮し、四国行きは取り止めました。限界知らずの谷口ゼミが旅行でこのような決定を下したことを珍

事と考えるか、それとも人生は計画どおり物事がはこぶものではないとの先生の教えが生きたと考えるか微妙なところです。ただこの変更によって、計画よりゆったりした旅行が展開されました。

二日目は午前中、うずしお科学館と人形浄瑠璃館を訪れました。ここは鳴門の海と、目と鼻の先には徳島県とが見わたせる小高い丘の上にあり、のんびりゆったりした気分になれました。次いで‘うずしお’を見に鳴門岬に向かったのですが、そこでの昼食後海の間近に降り立ち、広い海と緑の島々を眺めていると、二日酔いも醒めてくるほど不思議なくらい心地良い気分になりました。雄大な自然‥‥ふと先生が大鳴門橋を横目で御覧になりながら一言。「この建設で周辺の海の生態系もずいぶん変わったやろうな。」卒業旅行で環境問題に注意を喚起されると思っていなかったゼミ生は、返す言葉もなくただ顔を見合わせるだけでした。

ここで記念撮影をした後、我々は帰路につくことになるのですが、時間に余裕があったこともあり、“おのころ愛ランド”公園に立ち寄ることになります。かつてこの場所に思い出深い物語を刻んだ人もいたようですが、特筆すべきは開園時間が小一時間だというので、先生が値引き交渉に入られたことです。その結果、数十秒後には見事50%のアカデミック・ディスカウントがなされ、これには一同たまげました。こうして淡路島を舞台とした卒業旅行は幕を閉じてゆきます。そして須磨に着く頃には陽も傾き、同時にそれは四回生にとって大学時代の終わりを告げるものでした。

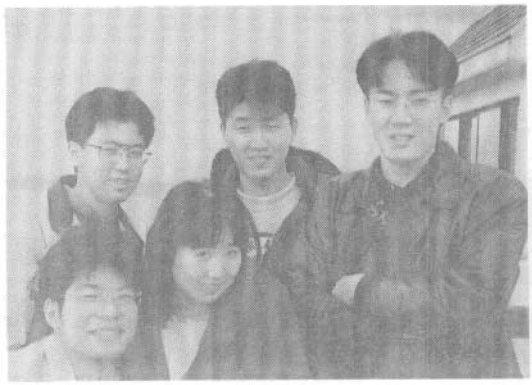
最後に、この旅行は阿部君はじめゼミ生の協力が無ければ思い出深いものにはならなかったでしょう。また谷口先生にはお忙しい中、御同伴下さり、加えて解散地・哲倫研究室では心暖まるお言葉を頂戴しました。素晴らしい先生とゼミ生に出会えたこと、心より感謝致します。

大鳴門記念館にて

残念ながらうず潮は見えませんでした。
「大鳴門記念館にて」

淡路島ファームパーク
動物とたわむれる。

お似合いのツーショット



満面の笑みの卒業生

4．ＶＴＲ製作後記

（１）「淡路島モンキーセンターＶＴＲナレーション」から

中橋さんとコータ（1983年）

私たち甲南大学谷口研究室では、七年前の1983年に淡路島モンキーセンターを初めて訪れた。参加者の強い印象は、話や本ではなく現実にコータたち奇形ザルに会ったことであった。そして野生状態にある奇形ザルたちを観察して、明るさと健全さを示していたことは、予想外のことであった。その体験によって奇形ザル一般についての暗いイメージは一掃され、むしろさわやかな、新鮮な驚きを感じると同時に、翻って、ともすれば無自覚に差別しがちな人間の立場への反省が促されたのであった。モンキーセンターでは、サルたちは象徴的な遊びを行っていた。それは彼らが、もちろん奇形ザルも含めて、水飲み場で手を水に入れ、しきりと泡をつくり、すくい上げ、じっと眺めていることであった。時にはそれを口元までもっていって、食べる行動をする。水の泡に浮かぶ虹を追い求める夢見るサルたちのように思えた。ボスザルや上位のサルが幼い奇形ザルをいたわる優しさ、成獣となった奇形ザルの一人前の主張、希望の虹の泡を追い求めるサルたち、このような温和なサル社会は孤独でギスギスした自己中心的な現代人の夢のない生き方に痛烈な批判の矢を放つものであった。

二度目のモンキーセンターの訪問で感じたことは、七年経過しても、日本の社会は変わることがなかった、いやむしろ環境汚染や破壊は進んだということだった。閉鎖された経済のシステム、そこに働く競争と効率の原理、生態系への廃熱、廃物の無限な放棄。それらは全てヒューマン・ネイチャーという人間的自然、つまり人間本性のゆがみから生じている。もう一度、人間も環境と同じものの表裏であることを思い出す必要があるだろう。今年一月に所長の中橋さんが、「コータ」への思いと、人類への警鐘のために『がんばれコータ』を出版された。それと時期を同じく、精一杯の人生を送ったコータはその使命を果たして天国に行ってしまった。

一つの完結は、もう一つのはじまりである。私たちも、コータの存在の意味を自らに背負いながら、21世紀に向かって新たに進むことを決心したのであった。

（脚本：谷口　文章，ナレーション：北村　光子）

（２）'90年夏合宿ＶＴＲあらすじ

90年夏合宿記録は、７年前に訪れたときの思い出から始まる。「あのときのサルはどうしているだろう？」「中橋所長はお元気だろうか？」そんな思いがモンキーセンターに到着したゼミ生の胸にはこみ上げていた。「どうも、ご無沙汰しております」と谷口先生の挨拶に中橋所長は、「やあ、どうも」と資料館から出てこられた。お身体の調子はあまりよくないとのことだったが、ゼミの二度目の訪問に快く応じてくださる。

山のサルたちはあいかわらずのんびりとした様子である。そんな中で、ゼミ生の目をとらえたのは奇形の新生児であった。今回訪問した年は、新生児42頭中８頭が障害をもっていた。しかし子ザルたちのかわいらしさはなんの変わりもない。

モンキーセンターの中には、サルの資料を集めた資料館があり、奇形ザルの資料もたくさん集められていた。そこでゼミ生は、コータや他のサルの写真、レントゲン写真や新聞の記事などの資料をバックに、所長から説明を受けている。モンキーセンターの歴史や今まで何が起こったか、また奇形ザルの発生原因についての説明を受けた後、ゼミ生は実際にサルを観察するためエサ場付近まで移動する。

エサ場では、サル達は温和な生活を営んでいた。エサ場付近の様子は７年前とずいぶん変わっているが、水飲み場やエサ場の建物は昔のままである。エサ場をバックに、ゼミ生は先生と中橋所長のお話しをうかがう。

ここでＶＴＲは、一挙に８月から12月へと時間を超える。合宿の成果を含めて谷口先生が講演された亀岡市民大学のシーンへとなる。「心豊かに感じ、考え、行動すること」と題された講演は、生涯教育を目指した亀岡市役所・教育委員会主催の下で、その中の第三章「感

市民大学においてＶＴＲを映す

じ、考える基盤」としての環境の話の中で、今回の記録の模様が映し出される。

市民大学の20歳からかなり年配の学生たちは、サルのシーンを見て思わず涙ぐむ人もいる。講演は約30分オーバーし満場の拍手で終了する。

この後ＶＴＲは再び淡路島へ移り、サルたちの姿や戯れる姿を流しながら終わってゆく。

今回のＶＴＲはサルたちの生態を捉えるだけでなく、ゼミ活動の報告でもあり、またそれと同時に社会に対する警笛の役割も果している。サルたちは訴える、自然や環境を汚した人間の諸業を、大自然の使者として。

（天野　雅夫）

（３）ＶＴＲ製作を通じて
その１

ある夏の記録をビデオに残す。今回は、わがゼミが淡路島モンキーセンターで見てきた様々な現実、そこで抱いた感情を整理することが作業の内訳であった。この奇形ザル記録のビデオは後に先生の講義で公開され、多くの学生に波紋を投げかけた。そこには、メディアの力を借りた、“場の共有”という価値が見出されたわけであるが、その価値の創出が、時間と忍耐と労力の結晶であることは、経験してみて初めて分かった。

中橋所長を囲んで

まず、現地で撮影した映像全てに目を通し、どのビデオになにが収録されているかを記録する。次に本編の構成を考え、その起承転結に応じた映像を選定する。とは言うものの、全ての映像を見るだけでも一仕事である。また選定では、撮影者および被撮影者（猿は除く）の経験不足が作業を困難なものにした。結局、八月の初回撮影分だけでの本編作成は難しいと判断し、Ａさん、Ｔ君、Ｋ君、そして私の四人で再び九月に撮影にいくこととなった。そこでは前回の反省が生かされ、撮るべきものも決まっていたので、じっくりと腰を据えて撮影することができた。

そうして、哲学倫理学研究室を拠点としながらも、時には先生のご自宅もお借りして、TAKE 1から2,3,4‥と編集作業を重ねた。骨子ができたところでテロップを加える作業があるのだが、これが様々な機械の立ち上がりのタイミングを測りつつ、挿入していかなければならず、最後の音入れとあいまって、非常に神経を使う作業だった。また、“これで完成”と思っても先生の承認を得ることはたやすいことではなく、幾度も修正を繰り返した。

そうするうちに完成度の方も着実に向上し、最後には講義にでも十分使える作品になった。それが、実証されたのが、先生が亀岡の市民大学で講演された時であった。その“心豊かに感じ、考え、行動すること”と題された講演で、その作品の一部が使用され、私も一般聴衆に交じってそれを見ていたのだが、先生の解説も加わって説得力のあるものに仕上がっており、私自身非常に驚いた。そこではじめて、制作段階での先生の細かい忠告の持つ意味が理解できたように思う。

最後に、今回の二度にわたる撮影に家族全員で協力していただいたモンキーセンターの中橋所長、合宿の指導をはじめ、作品の完成まで監修していただいた谷口先生、合宿の運営をしてくれたゼミ幹事の方、また撮影に協力してくれたゼミ生の皆に、心から感謝の意を表したいと思います。

（小西　克弥）

その2

編集したビデオはドキュメントである。しかし編集するにあたって、ドキュメントといえども、ストーリーや時間性を持たせ、ドキュメントだからこそ、事実のみであるから正確さを必要とし、そしてなにより、見る人が、作る側の言いたいことを、正しくそして深く分かってもらえるように考えなくてはいけなかった。

編集中は、常に客観的に仕上がりを見ていき何度も編集しなおした。そして編集する度に、長く、広くそして深くなっていった。

出来上がったビデオを見ていた人の中には、泣いていた人あり、おもわず声を出した人ありで、製作した側にとって大変うれしい話だが、できれば見たときだけでなく、後々まで心に残してもらえれば、もっといいなと思います。数カ月かかって作ったビデオが数十分となったが、その数十分が後の数年、数十年と、見た人に何かしら思いが残っていればと思った。

（木戸　英貴）

VTRカメラマン	小西克弥　木戸英貴
カメラマン補佐	辻　孝司　村松圭吾
記録	小谷英子　吉川亜子　小谷泰子
録音	本多成二　山本　香
音響効果	天野雅夫
技術	木戸英貴
ナレーション	北村光子
編集	奥山昌治　北村泰広
運営	阿部哲也　井垣博美　北村光子
協力	淡路島モンキーセンター
	中橋　実氏　延原 御夫妻
	亀岡市役所・教育委員会
監督・監修	谷口文章
制作	甲南大学文学部 哲学・倫理学教室 谷口研究室

資料館前にて

卒業おめでとうございます。

IV

卒業論文・卒業実験・研究生論文・ゼミナール論文

1．卒業論文・卒業実験

現代における絶望～キルケゴールの『死に至る病』をめぐって～

甲南大学　文学部　四回生　松本　昌樹

＜目次＞

序．
Ⅰ．キルケゴールにおける人間の実存規定
Ⅱ．絶望の特性
Ⅲ．絶望の諸形態
Ⅳ．キルケゴールにおける「絶望」の意義
まとめにかえて～現代における「絶望」～

＜要約＞

『死に至る病』(Sygdommen til Dφden) は、実存主義哲学の先駆的立場にあるセーレン・キルケゴール (Sφren A.Kierkegaard 1813-1855) により、人はいかに真のキリスト者となるかという教化と覚醒をその著述目的として書かれた。死に至る病＝絶望とは、キリスト教的な意味では肉体の死やこの世のあらゆる苦悩、死ぬよりも苦しいとされるものではなく、人間の自己が神を離れ、神を見失っている状態であり、これは現代の人間疎外の状態とも言えるだろう。このことはキルケゴールが別の著作『現代の批判』(En Literair Anmeldelse) においても述べている分別の時代、反省の時代、情熱のない無感動の状態に収まってしまう時代でもある。従ってキリスト教徒であるキルケゴールの言う絶望を理解し、現代に生きる我々において考察することは、様々な問題を内包した時代において重要なこととなるだろう。

キルケゴールは「絶望」を自己自身に関係する関係としての自己（総合）における分裂関係であるとし、その特性、諸形態を考察した。その時、重要な一つは人がその絶望を意識しているかいないかということである。絶望についての意識がない場合は、人は自己自身の明確な意識がなく、自己を精神として意識することをせず、そのような人は抽象的な普遍者である国家、国民等の中に安住しており疑問を持つこともしない。人が自らの絶望を意識している場合、そこには図のように意識と絶望の度合いの上昇に応じて形態の変化が見られる。そこで、絶望は神の前においてという規定のもとにさらに度を増しキリスト教の「罪」へと変わり、その中で最高度のものは、キリスト教を積極的に廃棄し虚偽とすることで、精霊に逆らう罪とされた。意識の度合いが増す程、絶望の度合いも増しているが、同時に明瞭化される意識により救済へも近づいていることになる。キルケゴールは絶望に対

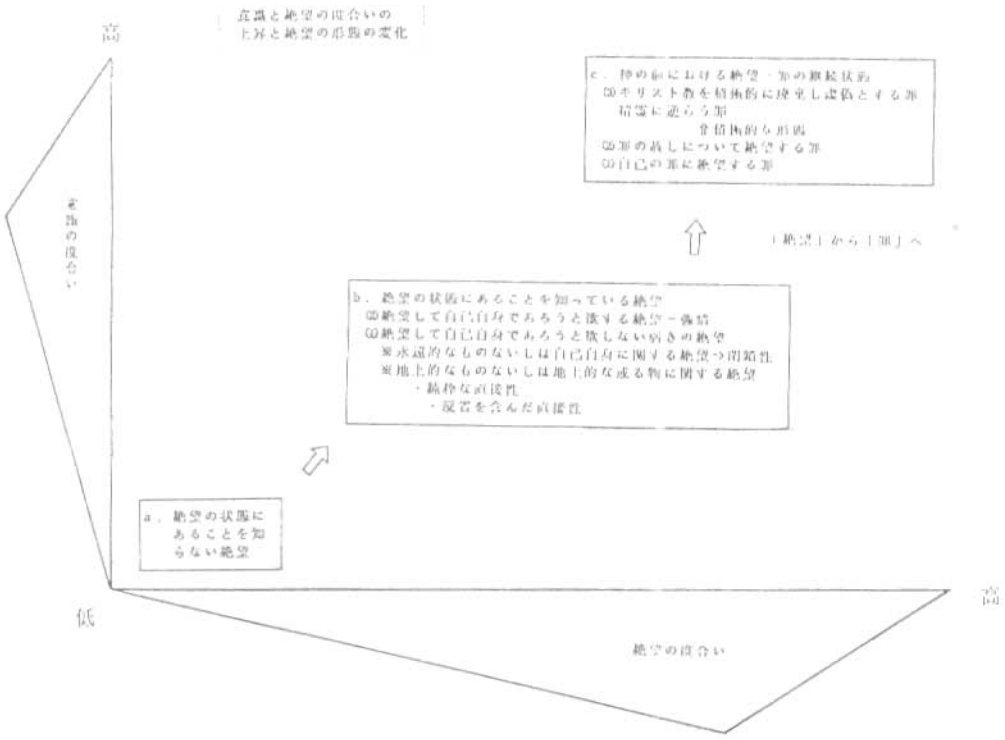
するものを信仰であるとし、罪対信仰という対立をキリスト教的に形づくることを主張し、絶望の何たるかを知らしめることによって教化と覚醒を果たそうとした。そこでキルケゴールの絶望についての概念を現代において考察してみる。

『死に至る病』を通して考察された絶望者の姿は、現代の我々の姿に似ている。彼らは自らが絶望していることを「気散じの手段としての仕事やせわしなさによって意識させないでおこうと努め」(①-P.78)ながらも自分は「孤独への渇望を感じることは稀ではない」(①-P.105)。しかし彼らの「間断のない社交の時代は孤独の前に非常な戦慄を感じている。」(①-P.106)。我々は自分達の社会に存在する様々な矛盾や問題を知りながらも、日常生活に埋没し流されており、立ち止り省みることをしない。もしそうすれば、自分達が絶望の状態にあることを認めざるを得なくなり、それらの矛盾に一人で向かうことで、現代の社会から逸脱してしまうことに不安を感じているのである。つまり現代の我々は自らの状態を知っていながら、そこに留まっているのだろう。

キルケゴールの著作活動の目的は真のキリスト者への到達であったが、それは和辻哲郎の言うように我々にとっても大きな意味を持つ。つまりキルケゴールの功績は「人間の存在における矛盾を摘発し、自己の内面性における真実の光景を明らかにしてこの問いに答えようとしたところにある。」(④－P.665)従って『死に至る病』により、我々は自らの絶望と無限の可能性に気付かされたのである。そこで自らの絶望を知った我々が、その中で無限の降下に陥ってしまうのではなく、上昇の方向(キリスト教でいう信仰)へと向かうにはどうすればよいのだろうか。ニーチェ(W.F.Nietzsche 1884-1900)は人間が自らを克服するために「神は死んだ」として神の観念を排し、人間が神から解放され独立したものとなる必要があると考えた。堕落したキリスト教においては、人間は自らの責任を放棄し、すべてを神に委ねてしまうが、キルケゴールは真のキリスト者として神への信仰のもとで、その責任を人間の手に返し、ニーチェは神を殺すことによってそれを人間のものとし、人間を超え「超人」(Übermensch)を目指した。

ニーチェが積極的なニヒリズムにより神を殺し、つまりすべてを神の前へと帰結させる価値観、世界観を転換したことが、我々が絶望に陥ってしまわないためにしなければならないことであろう。我々は自らの絶望の状態を知り得ても、既成の価値観、世界観の枠に留まっていては決して救済に向かうことはないだろう。従って我々はキルケゴールが人間存在を規程したように、自己は決してそれ自身だけでは存在せず、自己自身に関係する関係と自己との関係によってのみ存在することを認識し、そこに拠って立つ新たな価値観、世界観が必要となるであろう。

＜参考文献＞
①Ｓ．キルケゴール著　斎藤信治訳　『死に至る病』
（岩波文庫　1957）
②Ｓ．キルケゴール著　桝田啓三郎訳　『現代の批判』
（中央公論社　『世界の名著』第40巻　1966）
③大谷愛人・泉治典著　『キルケゴール　死に至る病』
（有斐閣新書　1980）
④和辻哲郎著　『ゼエレン・キェルケゴオル』
（岩波書店　『和辻哲郎全集』第一巻　1961）
⑤「理想」第555号-キルケゴール特集　対談：大谷愛人・柏原啓一
'キルケゴールと現代～日本のキルケゴール研究を回顧しつつ～
（理想社　1979）
⑥松波信三朗著　『実存主義』　（岩波新書　1962）



「金融環境の変化と公的金融」

甲南大学　経済学部　四回生　小花　直樹（中島ゼミ）

［はじめに］

低成長移行に伴う経済・金融環境の変化は、必然的にそれまでの金

融システムを変える圧力として働く。本稿で取り上げる郵便貯金（以下、郵貯）や政府系金融機関、いわゆる公的金融もその例外ではなかった。公的金融は財政と金融の両方に存立基盤をおく複雑な立場にあるが、以下金融機関自由化の進展とともに変貌する姿を考察してみる。

［公的金融の構造］

民間と競合し獲得する市場性・金融的側面の強い資金を、国家的見地より反市場性の分野に投融資する――戦後の公的金融はこう表現できよう。

公的金融は資金の調達、運用で見ると、全体像は民間金融と変わりなく、事実公的金融の入り口部分である郵貯金利は預金金利と、出口部分である貸出基準金利は長期プライムレートと密接な関係がある。だが他方内部構造では、資金の調達と運用は独立した別々の機関で行われている。それを結ぶ資金運用部が付す財投金利は、郵貯にとっては運用コストを、財投機関にとっては調達コストを意味する、両機関にとって損益を決する指標なのである。（図１）

公的金融の民間に対する有利の源泉は①財投金利が低かった（後述）②貸出面において基準の金利であった（民間は最優遇）③拘束預金という歩積両建がない④補助金、補給金の存在、等がある。これらの条件を基盤に公的金融は間接金融機能を発揮していた。

［転換期を迎えた公的金融］

日本では長らく各種金利が相互に密接な関係を保ち、規制された市場のもとで規制金利体系を形成していた。そこでは流動性が高く、信用度が高いほど金利は低位にあり、逆の場合は高位にあった。すなわち長期金利は短期金利よりも高いことが理とされていた。

公的金融に関する金利では、預託金利は短期金利に、貸出基準金利は長期金利に位置している。右上がりのイールドカーブが当然視されていた日本の金利構造において、このことは資金の調達と運用が組み合えば利鞘が生じることを意味し、さらに機関別で言えば、大きな利鞘を得るのは政府系機関であった。つまり整合性を保つ長短金融市場と低い郵貯金金利は公的金融を支える二本柱と言えよう。

だが公的金融を飲み込む金融自由化の波は①昭和60年10月。預託金利の短期金利体系からの切断、②昭和62年３月、資金運用部資金法の政令制移行（預託金利法定下限の廃止）を引き起こす。

これらは長期金利低落による必然的帰結と言える。だが根源的問題は規制金利を前提に存立していた制度が崩壊したことなのである。

［新たな公的金融システムに向けて］

自由金利の中で機能しうる公的金融システムへ――、資金法政令制

はだがしかし完全な市場連動化には不十分であった。というのは国債の応募者利回りではなく、表面利率を指標したからである。とはいえ現実にはその後貸出金利は上昇し、外部環境の好転をもって深刻な局面は打開しえた。

ここにおいて政府系金融機関は利鞘を0.9%確保できる。なぜなら民間の長期貸出金利（図2のA）は、国債金利と密接な関係にある5年物利付金融債に0.9%加えた率である。他方官業はAと同水準に基準金利が決まり、その資金コストである預託金利は民業と同じく国債利率を指標としているからである。（図2）政令制後とりわけ平成元年、貸出機関に約0.9%の利鞘がみられるのはこのためである。（図3）

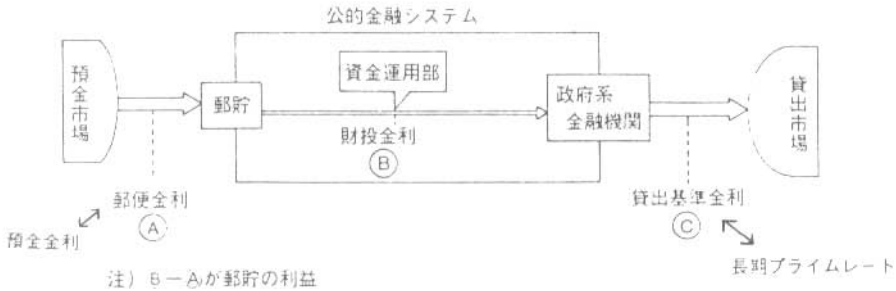
では最後に‘金融自由化と公的金融’の関係を見据える上で考慮すべき課題を提示しよう。第一に郵貯自主運用、これは市中金利を下回る預託金利での運用が金融自由化の中、金融機関としての郵貯の存立を危くするとの根拠による。だが同時に郵貯は財投入口機関という顔もあり、今後はなお両者併存した郵兎像が望まれる。

第二は預託金利の設定。前述の如く預託金利は政令により決められるが、その際7年以下の機関別金利にも市場金利の反映する指標が必要となろう。また預託期間が長いほど高金利ではあるが、昨今頻繁におこる長短金利逆転現象にはそぐわない設定である。

第三は運用部一元方式と財投機関の統廃合。集められた資金はその具体的政策実現機関による重複・競合によるメリット相殺という実情を打破しなければならない。

「有償の資金を市場性の希薄な分野に融資する、金融と財政の狭間に位置する公的金融」この観点こそが公的金融を沈潜するトゥールである。いずれか一方に偏る議論は避けねばならない。

図1　預託金利と諸会計の関係



注）B－Ⓐが郵貯の利益
C－Bが政府系金融機関の利益

預託金利と融通金利（合わせて財投金利とも言う）は同一レートである

図 2

官民の長期貸出機関の構造

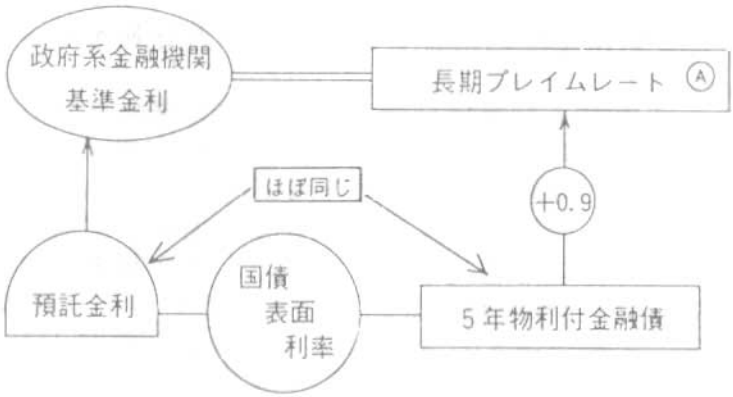
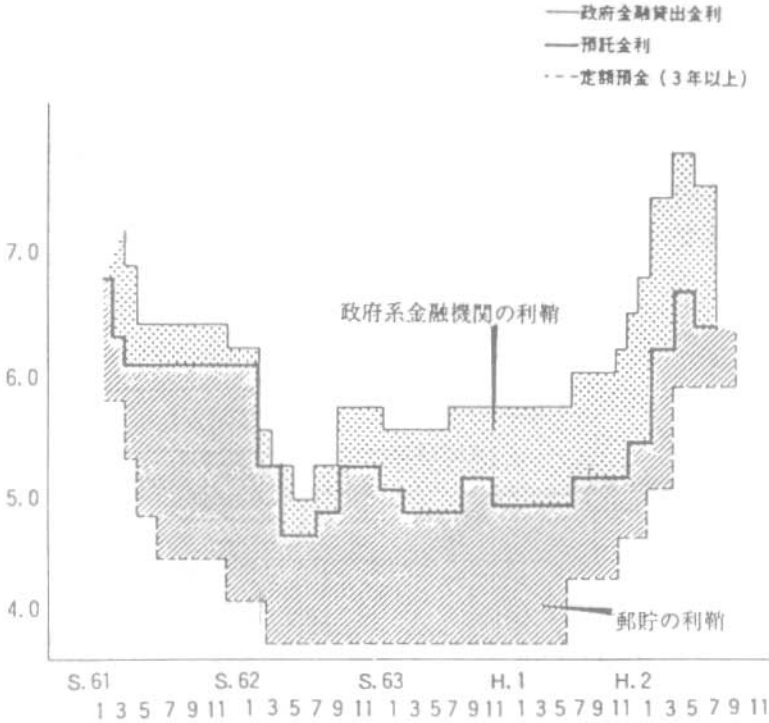


図 3

財投金利の推移

(昭和61年1月より平成2年7月まで)



(注)「財政金融統計月報」

「統計便覧」等より作成